2011年度 防災教育 チャレンジプラン 活動報告会

Disaster Management Education Challenge Plan Competition

2011年度 防災教育 チャレンジプラン 成果発表

2012年度 防災教育 チャレンジプラン 決定・発表

日　時：2012年2月11日（土）10:00 ～ 17:30
会　場：有明の丘基幹的広域防災拠点施設（東京・有明）
参加費：無料（事前登録受付：2012年2月3日（金）まで）

会場への入場は事前登録制となっておりますので、ご来場する際にはホームページ（http://www.bosai-study.net/）にて事前登録をお願い致します。

www.bosai-study.net

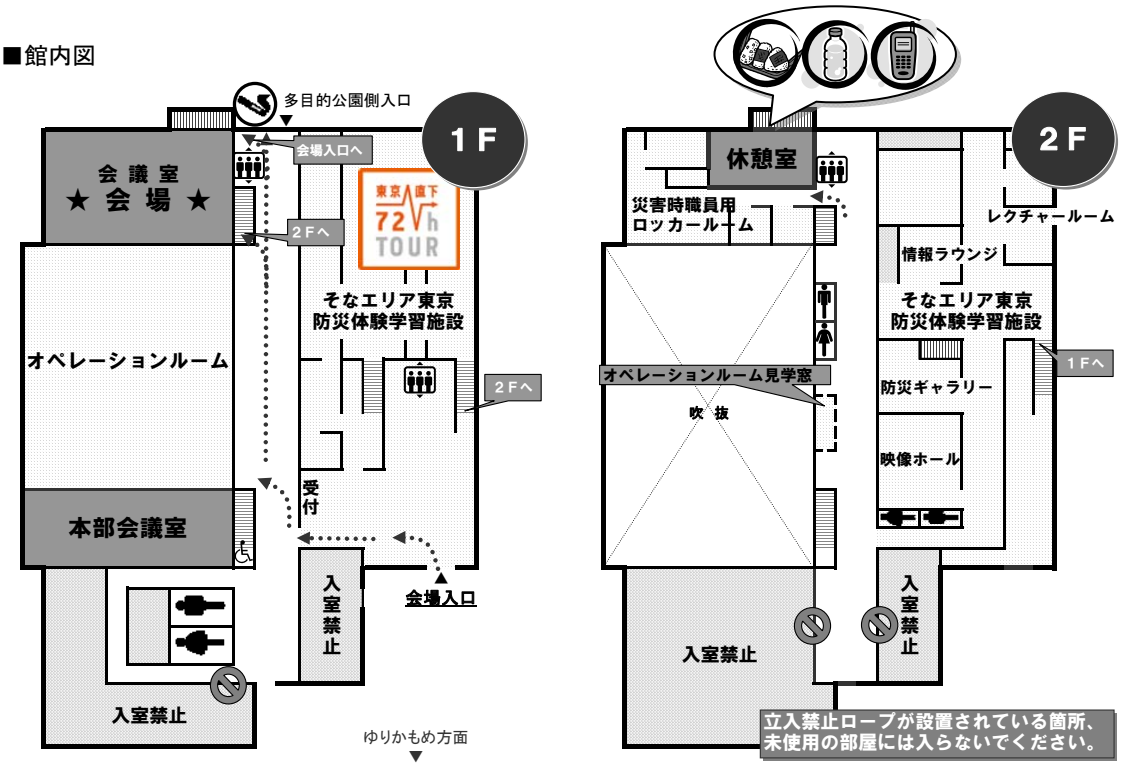
主催：防災教育チャレンジプラン実行委員会・内閣府（防災担当）

後援：総務省消防庁・文部科学省、国土交通省・全国知事会・全国市長会・全国町村会・日本赤十字社・全国都道府県教育委員会連合会・日本ＰＴＡ全国協議会

「防災教育チャレンジプランは、（財）河川環境管理財団の河川整備基金の助成を受けています」

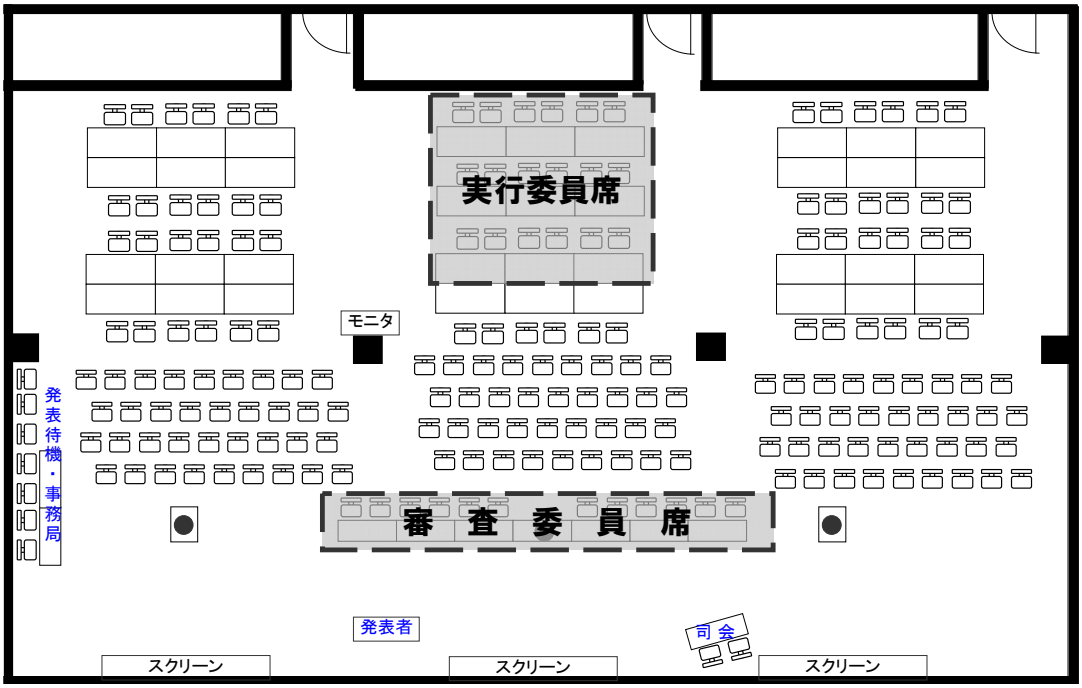
会　場　図

■館内図



※　報告会会場は、飲食及び携帯電話の通話をご遠慮ください。飲食は 2 階休憩室をご利用ください。
※　施設内の機器には、お手を触れないでください。
※　未使用の部屋には立ち入らないでください。

■会場図（会議室内）



※　報告会会場内の機器には、お手を触れないでください。使用できません。

防災教育チャレンジプランとは？

国内外で大規模な災害が起きている昨今、またいつ災害がやってくるかわかりません。いつやってくるかわからない災害に備え大切な命を守り、できるだけ被害を減らし、万が一被害があった時すぐに立ち直る力を一人一人が身につけるため、全国の地域や学校で防災教育を推進するためのプランです。

全国各地の防災教育への意欲をもつ団体・学校・個人等に対し、より充実した防災教育のプランを募集し、「防災教育チャレンジプラン」として選出した上で、その実践への支援を行います。
１年間の実践の後、その実践例や支援した取り組みの内容をワークショップを通じて広く公開・共有するとともに優れた実践の表彰を行うことで、全国の防災教育に取り組む団体・学校・個人やそのプランに光をあて、各地域で自律的に防災教育に取り組むことのできる環境づくりを目指します。

実行委員の紹介

委員長
林　春男　京都大学防災研究所巨大災害研究センター 教授

市川 啓一　株式会社レスキューナウ危機管理研究所 代表取締役
井上 浩一　防災ネットワークプラン 代表
鍵屋　一　板橋区 福祉部長 兼 危機管理担当部長(計画担当)
木村 玲欧　兵庫県立大学 環境人間学部 准教授
国崎 信江　株式会社危機管理教育研究所 代表
栗田 暢之　特定非営利活動法人レスキューストックヤード 代表理事
澤野 次郎　災害救援ボランティア推進委員会 委員長
篠田 貴司　東京都葛飾区立綾瀬中学校 教諭
鈴木 克明　熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻 教授
諏訪 清二　兵庫県立舞子高等学校環境防災科 科長
田村　拓　SCSK株式会社 執行役員
中川 和之　株式会社時事通信社 山形支局長
永田 宏和　特定非営利活動法人プラス・アーツ 理事長
平田　直　東京大学地震研究所地震予知研究センター センター長･教授
福和 伸夫　名古屋大学大学院環境学研究科 教授
舩木 伸江　神戸学院大学人文学部人文学科 准教授
松尾 知純　防災ゲート・パートナーズ 代表
南島 正重　東京都立両国高等学校・附属中学校 主幹教諭
越智 繁雄　内閣府政策統括官(防災担当)付参事官(地震･火山･大規模水害対策担当)
五島 政一　国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部 総括研究官
仲程 倫由　内閣府政策統括官(防災担当)付企画官(災害予防担当)
南山 力生　文部科学省研究開発局地震・防災研究課防災科学技術推進室 室長
山口 英樹　消防庁国民保護・防災部防災課 課長

（平成 24 年 2 月 11 日現在、所属役職別 50 音順、敬称略）

プログラム

9:00 受付 ～　　※受付場所： 1階エントランスホール

10:00 開会

10:00 開会挨拶

（ 防災教育チャレンジプラン実行委員会委員長　林 春男 ）
（ 内閣府大臣官房審議官（防災担当）　長谷川 彰一 ）

10:10 施設紹介

（ 内閣府政策統括官（防災担当）付参事官（地震・火山・大規模水害対策担当） 越智 繁雄 ）

10:20 2011年度 実践団体発表　　**司会：（ 防災教育チャレンジプラン実行委員 南島 正重 ）**

10:20～	（ ① 糸魚川市立根知小学校	）	（1 団体 10 分）
10:30～	（ ② 高塚台2丁目自治会	）	
10:40～	（ ③ 愛知県立半田商業高等学校	）	
10:50～	（ ④ 北海道滝川高等学校	）	
11:00～	（ ⑤「やさしい日本語」有志の会	）	
11:10～	（ ⑥ みえ防災コーディネーター・三泗ブロック	）	
11:20～	（ ⑦ 新潟県立柏崎工業高等学校	）	
11:30～	（ ⑧ 八女市上陽防火委員会	）	

11:40 2011年度 実践団体発表 総 括

（ 防災教育チャレンジプラン実行委員　澤野 次郎 ）

11:55 昼 休 憩 《60分》

12:55 2011年度 実践団体発表　　**司会：（ 防災教育チャレンジプラン実行委員 中川 和之 ）**

12:55～	（ ⑨ 東京都立田無工業高等学校	）	（1 団体 10 分）
13:05～	（ ⑩ 茅ヶ崎トラストチーム	）	
13:15～	（ ⑪ 高津養護学校たかつ地域ネットワーク推進会議	）	
13:25～	（ ⑫ 千葉県立東金特別支援学校	）	
13:35～	（ ⑬ 千葉県立姉崎高等学校	）	
13:45～	（ ⑭ 秋田県大館市立第二中学校	）	
13:55～	（ ⑮ 宮城県大河原町立金ヶ瀬中学校	） ※1	
14:05～	（ ⑯ 釜石市立釜石東中学校	） ※1	
14:15～	（ ⑰ 南三陸町立歌津中学校	） ※1	

14:25 2011年度 実践団体発表 総 括、サポーター認定、記念撮影

（ 防災教育チャレンジプラン実行委員　澤野 次郎 ）

14:55 休 憩 《15分》

15:10 2012年度 実践団体発表　　**司会：（ 防災教育チャレンジプラン実行委員 木村 玲欧 ）**

15:10～	（ ① 秋田県大館市立第二中学校	）	（1 団体 5 分）
15:15～	（ ② 気仙沼市立階上中学校	）	
15:20～	（ ③ くにたち地域外国人のための防災連絡会（KUNIBO）	）	
15:25～	（ ④ 千葉県立東金特別支援学校	）	
15:30～	（ ⑤ 糸魚川市立根知小学校	）	
15:35～	（ ⑥ 横浜市立北綱島小学校	）	
15:40～	（ ⑦ 立命館大学国際部国際協力学生実行委員会（CheRits）	）	
15:45～	（ ⑧ 東京都立調布特別支援学校	）	
15:50～	（ ⑨ 新潟市立新潟小学校	）	
15:55～	（ ⑩ 志摩市立国府小学校	）	

16:00 休 憩 《10分》

16:10～	（ ⑪ 和歌山大学防災教育チーム SAZANKA	）	
16:15～	（ ⑫ みどりが丘小学校学校支援委員会環境整備部	）	
16:20～	（ ⑬ NPO 法人大杉谷自然学校	）	
16:25～	（ ⑭ 秋田理教クラブ	）	
16:30～	（ ⑮ わがやネット	）	
16:35～	（ ⑯ 四日市市中央学童保育所	）	
16:40～	（ ⑰ NPO 法人はままつ子育てネットワークぴっぴ	）	
16:45～	（ ⑱ 山口県立大学災害ボランティア実行委員会ぶちボラ YP 勇気	）	

16:50 2012年度 実践団体発表 総 括

（ 防災教育チャレンジプラン実行委員　鍵屋 一 ）

17:15 2011年度 防災教育チャレンジプランの表彰・講評

（ 防災教育チャレンジプラン審査委員会委員長　近藤 信司 ）

17:30 閉会

17:30～17:45 次年度団体 説明会（ 各2012年度実践団体より1名参加 ）
18:00～20:00 交流会 （ 希望者のみ対象 ）　　※別会場にて開催

※1 復興教育支援事業対象校（ 文部科学省では、復興に向けた教育支援活動を展開する団体が行う取組を支援しています。 ）

実践団体の紹介

① 糸魚川市立根知小学校 ／ 新潟県糸魚川市《小学校の部》

糸魚川市が世界に誇るジオパーク。ジオパーク特有の自然災害やそこで営まれてきた産業、文化について、理解を深めることは重要である。地域住民と共に、地域の未来を考え、「自分の命は自分で守る」という意識が高まるよう、これまでの教育活動を防災の視点から再構成する。防災とジオパーク、地域の3つを関連付けた総合的な学習の時間の実践事例、地域防災における学校、地域の連携に向けた取組事例として提案する。

② 高塚台２丁目自治会 ／ 奈良県河合町《大学・一般の部》

これまで培ってきた地域のマンパワーと学校との連携をさらに発展させ、「魅力的なイベント」として河合町役場が行ってきた防災イベントのノウハウを吸収・進化させ、防災＋防犯を中心とした「楽しく・人の集まりやすい」イベントを開催する。訓練や寸劇、家具転倒防止講習会などを通じて防災が日常となる地域づくりを目指す。

③ 愛知県立半田商業高等学校 ／ 愛知県半田市《高等学校の部》

本校生徒が三河地震や伊勢湾台風等の被災者からの聴き取り調査を通じて製作した防災教材「防災を語り継ぐ電子紙芝居」を活用し、近隣の小中学校に「出前授業」を実施する。市内の専門高校と連携を図り、防災グッズの企画・製作・販売に取り組む。

防災に関する知識の習得だけでなく、現在の若者に必要であるコミュニケーション能力の育成、学校教育で重要視されている道徳心の育成を図る。また、マスコミを通じ、全国の高校生に対する防災教育の啓発活動を行う。

④ 北海道滝川高等学校 ／ 北海道滝川市《高等学校の部、大学・一般の部》

【目的】 1，生徒が生活者の視点で地域を見ることができるようになる
2，行政とコラボレートし、協働でまちづくりを考える
3，ケータイとGISを使ったシステムを構築する

【特徴】 1，高校生がまちづくりに積極的に関わる点
2，身近なケータイを使ったものでケータイとGPS機能搭載であれば誰にでもできる
3，GPS・GISを使ったシステムづくりである

⑤ 「やさしい日本語」有志の会 ／ 京都府京都市《大学・一般の部》

在住外国人や外国人観光客の多い京都。災害時には「言葉の壁」「制度の壁」「心の壁」がよりいっそう高くなります。「やさしい日本語」有志の会では、京都のボランティア日本語教室で防災授業に取り組んでもらうことで「言葉の壁」を、他団体の方々との連携で行政に働きかけて「制度の壁」を、そしてワークショップを通して、より多くの方々に「やさしい日本語」を知っていただき、「心の壁」を低くする活動を今年も積極的に進めていきます。

⑥ みえ防災コーディネーター・三泗ブロック ／ 三重県四日市市《小学校低学年の部、小学校高学年の部、大学・一般の部》

災害発生、避難所へ、電気・ガス・水道断絶状況下で、食の確保ぐらい避難者の自主的活動とりくみで確保するための、全員参加型・体験訓練を実践する事業提案ですが、将来を担う世代の育成と親の参加による「次世代育成」さらに、これら体験を地域活動にとりこみ、主体的に立ち上がる地域防災力の向上と防災コミュニティの力を構築するための目的と特徴を持ち合わせたプランです。

⑦　新潟県立柏崎工業高等学校　　／　新潟県柏崎市《高等学校の部》

被災地となった体験を生かし、防災マインドやボランティア精神の育成を目指して、学校教育と地域活動が一体となった地域社会に貢献できるリーダーの人材育成を目的とする。

防災活動を実践している学校・団体は多く存在するが、カリキュラムに直接、取り入れている学校は少ない。防災教育に必要な学習活動や課外活動などを実践しながら、防災教育が本校の特長ある学校づくりとなることを全国に発信したい。

⑧　八女市上陽防火委員会
／　福岡県八女市《保育園・幼稚園の部、小学校高学年の部、大学・一般の部》

今年度、少年消防クラブが消防庁からの「モデル少年消防クラブ」の選定を受け、救急法訓練用資器材、強力ライト、布担架等の購入を行いました。それに伴い、少年消防クラブを対象とした取扱訓練を計画していましたが、今回の「防災教育チャレンジプラン」を知り、少年消防クラブに限らず婦人防火クラブ、幼年消防クラブを一体とした総合訓練を実施し、各クラブの連携、世代間の交流を深めることを目的に応募したものです。

⑨　東京都立田無工業高等学校　　／　東京都西東京市《高等学校の部》

【目的】「西東京消防署及び地域防災ネットワークと連携し、防災ボランティアの育成・防災ネットワークづくりに協力する。」

【特徴】 1．工業高校の特性を活かして、西東京消防署の協力により、災害時に必要な技術講習会を実施。救助器具取扱い訓練では、チェーンソーや削岩機、油圧ジャッキを使った救助訓練を行う。

2．消防活動訓練、初期消火訓練では、本校に設置される予定の動力可搬ポンプによる放水訓練を地域防災ボランティア、近隣住民とともに行う。

⑩　茅ヶ崎トラストチーム　　／　神奈川県茅ヶ崎市《保育園・幼稚園～ 大学・一般の部》

休業中に校庭で遊んでいる時の地震を想定したイベント「Theサバイバル 2011」を実施し、緊急時の不安や恐怖を軽減するとともに、防災に対する意識の高まりを促す。また、毎月行うイベントに防災要素を盛り込み、遊びの中で楽しみながら、協力すること、助け合うこと、分け合うこと、そして茅ヶ崎を大切に思う経験を積み重ねる。さらに共通の問題をかかえる、子どもたちの活動を行う諸団体と緩やかな連携をとり、地域の防災力を高める。

⑪　高津養護学校 たかつ地域ネットワーク推進会議
／　神奈川県川崎市《小学校低学年の部～ 大学・一般の部》

障害がある児童生徒の避難所設営等防災訓練を通し、防災意識を涵養するとともにと地域活動により社会参加への機会を提供する。また、学校と地域との協働による防災訓練をとおして、地域防災のあり方を探る訓練内容を実施する。さらに、災害時要援護者と地域住民との交流の機会とし、障害の理解推進を図り、地域コミュニティ活性化の一助としたい。この訓練の特徴として、障害児や高齢者・外国の方等要援護者が参加する実際的な訓練であることがあげられる。

⑫　千葉県立東金特別支援学校　　／　千葉県東金市《小学校低学年の部～ 大学・一般の部》

地域の自治会や老人会等と特別支援学校との夜間を含めた防災訓練を行うことで、地域と一体となって防災に対する意識を高める。防災安全マップの作成等の防災交流を通して、防災について得た情報を学区である二市四町（東金市、山武市、大網白里町、九十九里町、横芝光町、芝山町）に発信し共有していく。また、日々の授業を通して、障害のある児童生徒に対する防災教育のポイントを探ったり、障害に応じた防災用具の開発に取り組んだりする。

⑬ 千葉県立姉崎高等学校 ／ 千葉県市原市《高等学校の部》

本校の西側へ約3キロ先には京葉工業地帯があり、大手企業の工場が建ちならぶという立地条件から工業地帯特有の大規模災害発生時の避難場所となることが想定される。そうした際に備え、学校・地域住民及び地元企業が合同防災訓練や研修会等を行うことにより、学校と地域の間に強いネットワークの構築を目指す。

また、県内の大学が有する危機管理についての専門性を活用し、千葉県教育センターとの連携のもと、本校において研究成果を検証し、防災教育の推進を図る。

⑭ 秋田県大館市立第二中学校 ／ 秋田県大館市《中学校の部》

中学生としてできる地域での防災活動や防災訓練などに積極的に参加する意識と、保護者、地域と協力した活動により、地域の防災意識を高め、「自らの生命は自らが守る」という自助と「自分たちの地域は自分たちで守る」という共助の考え方を軸に危機管理・防災教育を推進する。また、通学路を中心とした地域における地震発生時の危険箇所に気づき、その対策などについて自分たちで作成した「地域防災マップ」を活用して、具体的な行動化に結びつく力を身につける。

⑮ 宮城県大河原町立金ヶ瀬中学校 ／ 宮城県大河原町《中学校の部、大学・一般の部》

本プランでは、学校と地域が協働して防災教育とその実践を構築することをめざす。このため、本校は地域有識者の住民からなる学校支援組織を設立し、その支援を受けて中学生が主動(中心になり活動)する地域防災訓練などを実施する。このような実践を通じて、中学生と地域の防災意識を高め、自助と共助の在り方を共有することで地域防災力の向上を図る。また、その波及効果として、学校・生徒・住民間のつながり・関わりの絆づくりや持続可能な地域社会づくりに貢献できる可能性が期待できる。

⑯ 釜石市立釜石東中学校 ／ 岩手県釜石市《中学校の部》

【目的】 1. 自分の命を大切にする ～避難生活から日常生活に向けて～
2. 助けられる人から、助ける人へ ～家庭・地域の一員としての自覚を高め、地域のために行動できる生徒の育成～
3. 命てんでんこ ～地域の防災文化の継承者の育成～

【具体的な成果イメージ】

1. オリエンテーション	5月	今までの防災教育が、命を救ったこと、今後も防災意識を持つこと
2. 避難訓練	5月	今までと違う環境の中でも、自分の命を守る
3. 講演会	5月	避難生活や慣れない学校生活のストレスをためない
4. ボランティア活動	7・8月	地域の一員として、地域に貢献する
5. 防災ボランティースト	9月	コースに分かれて、災害に負けない心を培う
6. 地域に発信	11月	たんぽぽコンサートで、元気になった釜石東中を地域に発信する
7. 目指せ！EASTレスキュー隊員合格！・・・5級から1級を目指し、自分で目標を決め取り組む		

⑰ 南三陸町立歌津中学校 ／ 宮城県南三陸町《中学校の部》

大震災を受けて、傷ついた生徒たちの心のケアを行い、前向きな態度を作っていく。また学習面の支援や生活面の充実を目指し支援を行っていく。さらには、地域社会の方々に、校内の行事等を公開するなどし、復旧・復興に向けた元気をもってもらうようチャレンジしていく。

加えて、大津波によって壊滅的な被害を被った地域のコミュニティを守ることを目的として、中学校に地域のコミュニティセンター的な役割を持たせ、「すばらしい歌津をつくる協議会」や避難所の自治組織などと中学生たちがともに話し合い、様々な行事を行ったりする中で、地域社会の未来に明るい希望がもてるようにしたい。

また、千年に一度と言われる津波の記録を残し、他の地域や後世に役立ててもらえるものを製作する。

2011 年度防災教育チャレンジプラン

①　糸魚川市立根知小学校

プラン名　根知小発！ジオパークの大自然と向き合う地域防災教育

プランの対象　小学校児童
地域住民

所在地　新潟県糸魚川市

―プランの目的・ここがポイント！

①従来のジオパーク学習と地域（住民）にかかわる教育活動に防災教育の視点を加え、教育活動を整理・体系化し、市内の学校へモデルプランを提案する。

②防災についての研修を地域に働き掛けながら進め、地域防災の連携及び体制強化を図る。

―プランの概要

①糸魚川市が世界に誇る自然環境（ジオパーク）は、地域の歴史であり、宝であり、生活環境そのものである。ジオパークとしての根知地区の抱える自然災害の現状とその対策の方法を理解し、そこで営まれる主要産業である農業、また大事に継承されてきた伝統文化について知り、これからのあり方や自分の生き方などを考える。

②ジオパークに位置する地域特有の土石流や地滑り災害、活断層上に位置する土地ならではの危険性を地域住民とともに再認識し、学校・地域防災の在り方を考える。

③これまでの学校教育活動を防災教育の視点から再構成し、これまで以上に児童が「自分の命は自分で守る」という意識を高める。

―期待される効果・ここがおすすめ！

①地域と学校が、防災教育を共通話題とすることで、地域と学校の連携が深まる。

②学校が防災教育にチャレンジすることで、地域の自主防災組織の立ち上げの起爆剤となる。

―成果として得たこと

・防災教育チャレンジプランを推進していく上で、地域の振興協議会をはじめ、公民館、さらに地域住民とのかかわりが深まり、これまで以上に、協力的に教育活動を支援していただいたこと。

・これまで何年もの間、自主防災組織の立ち上げが地域で話題になりながらも実現されなかったが、小学校が防災教育チャレンジプランに取り組んだことがきっかけとなり、来年度から自主防災組織が立ち上がることになったこと。

・実践団体の特色ある取組やその前向きな姿勢に触発されたこと。

―全体の反省・感想・課題

・市内の学校を代表し、防災教育チャレンジプランに取り組んだ。活動の内容は、防災通信にまとめ市内の学校へ配布するなど、取組を積極的に配信するように心がけたが、十分な理解を得られている手ごたえを感じられなかったこと。

・「総合的な学習の時間での防災教育の実践」については、何とか防災の視点を取り入れたものの児童評価はあまり高くなく、改善の余地があること。

・防災教育に取り組むことの重要性や防災教育チャレンジプランの実践団体として取り組むことのメリットを市内の学校、教育委員会等に周知し、市内全ての学校が防災教育チャレンジプラン 2012 に応募するような働きかけができなかったこと。

―今後の継続予定

・防災教育チャレンジプラン２０１２に再チャレンジを決意！地域の自主防災組織と連携し、学校を避難所とした防災訓練を行う予定である。また、職員研修のテーマを防災教育にかかわる内容に特化し、一人一研究により、防災教育を推進する。

② 高塚台２丁目自治会

プラン名　学校を巻き込んだ、防災・防犯を一体化した地域の安全・安心向上作戦

プランの対象　児童・地域住民・教諭・保護者

所在地　奈良県河合町

―プランの目的・ここがポイント！

これまで防犯活動や通学路での子どもの見守り、学校支援ボランティアを通じて培ってきた地域と学校の繋がりをもとに、児童期から防災・防犯を学ぶことで防災・防犯を身近な「日常化」として捉えるようにする。そこから将来のリーダー育成につなげていく。

「いつも見守りしてくれているおっちゃん・おばちゃん」がゲストティーチャーになり、日常の生活から切り離せない防犯だけでなく防災も学習することにより、地域で活動している人々と児童・教諭との連携が強まる！

―プランの概要

１『防災訓練（魅力的なイベント防災+防犯「かえるきゃらばん！」）』の実施
２「防災・防犯をテーマとした寸劇」の実施
３「家具転倒防止講習会・モデル事業」の実施
４　防災・防犯活動の実施とそのマニュアル作成

―期待される効果・ここがおすすめ！

真面目と楽しいを融合し、近隣のつながり・絆を深め、顔の見える関係を築き、助け合う心を育てること。（住民の自助・共助意識の向上＋地域・学校・行政の連携）

―成果として得たこと

町内小学校では初の試みとして総合学習を多く割き、学校と地域及び行政が一体となって地域の防災防犯について児童をメインに高学年が低学年に教えることを前提として学習・制作することにより、児童や学校での意識の底上げができた。また、防犯だけや防災だけの取り組みとはしなかったため、自主防災会のみではなく、町内の様々な団体とも協働でき、人的なつながりが構築された。

防災教育チャレンジプランが契機となり、町教育委員会から町立小中学校へ学校安全に関わる基本的な計画を見直す提案がされ、全体のレベルアップを図ることになった。

―全体の反省・感想・課題

児童からの意見を採用することを優先させたことについては、スタッフの予想をはるかに上回る児童の発想や意見が多く、逆に驚かされるところが多かった。大人においてもいえることだが、チームにリーダーがいることにより意見や行動がまとまりやすく、リーダーの存在の大切さを実感した。また、チャレンジプランを実行したことにより、学校と地域の繋がりがさらに強まり、学校支援ボランティア内にも防災意識が高まった。

―今後の継続予定

「継続は力なり」という言葉どおり、やり続けていくことで周りを巻き込み納得させながら地域の意識や防災力、防犯力を底上げしていく。地域だけ、学校だけ、行政だけの活動にならないよう、お互いに働きかけながら様々な場面で人と人がつながっていく仕掛けづくりをする。

2011 年度防災教育チャレンジプラン

③　愛知県立半田商業高等学校

プラン名　レスキューハイスクール。育み隊！

プランの対象　児童・生徒
地域住民・企業

所在地　愛知県半田市

☆☆☆

―プランの目的・ここがポイント！

1　防災教育を通じて、本校生徒の人間的成長を図る。
2　市内の小中学校で「出前授業」を実践し、小中学性の防災意識を啓発し、地域貢献を果たす。
3　「防災商品」の企画・製作により、商業高校の視点から防災教育を普及・発展させる。
4　地域住民・行政・企業と協力し、復興支援活動を行う。
5　マスコミを媒体として、全国の小中高校生の防災意識を啓発する。

―プランの概要

防災教育活動として、本校は大きく３つの活動を行った。

・防災商品開発・・・地元企業協力のもと、防災グッズとして本校オリジナル商品「ごんぱんだ（仮）」の企画・製作を行う。今年度中の商品化を目指す。
・出前授業・・・“デジタル防災紙芝居”を用い、近隣の小中学校を訪問し、本校生徒が授業を行う。今年度の改良点として、「防災こどもノート」や被災地からの転校生の“生の声”も授業に取り入れる。
・復興支援活動・・・“ハートツリー”の売上金を全額被災地に送る“半商ハートツリー・プロジェクト”。ハートツリーは地元企業・澤田農園のオリジナル商品で、本校へ無料提供された。

―期待される効果・ここがおすすめ！

「商業」と「防災」を掛け合わせることで防災教育の可能性を拡げた。地元住民・企業・小中学校に

―成果として得たこと

・商品開発：オリジナル防災商品「ごんぱんだ（仮）」は、しっとりとした食感の缶入りパン。ドライフルーツ入りとさつまいも入りの２種類を開発。商品名とキャラクターは“カンパン”と“半田”と半田市名物“ごんぎつね”に因んでつけられた。
・出前授業：昨年度から地元の小中学校10校を回り、“デジタル防災紙芝居”を活用した防災に関する出前授業を実施。今年度は『防災こどもノート』等のオリジナル教材を製作し、児童との交流を重点においた授業を展開した。小中学生の防災に関する意識を高めた。
・復興支援活動：様々な行事・イベントで販売実習を行い、約３カ月間で1,160鉢もの“ハートツリー”を販売。募金を合わせ、義援金総額は3,513,204円となった。11月４日に代表生徒が宮城県石巻市を訪問。転校生の母校である石巻市立女子商業高等学校へ義援金とハートツリーを届けた。この活動は新聞・ラジオ・テレビと多くのメディアで取り上げられ、全国から大きな反響を得た。

―全体の反省・感想・課題

「商業高校だからこそできる防災教育は何か」を考え、活動を行ってきた。結果、商品開発や商品販売など商業高校ならではの活動を通して、生徒の防災の意識を高め、同時に校外に向けての働きかけを行うことができた。

―今後の継続予定

本校オリジナル防災商品の販売活動を通じて、地域の防災意識と防災力向上に取り組む。石巻市立女子商業高等学校との連携を図り、復興支援を続けるとともに、防災教育に役立つ情報交換を積極的に行っていく。出前授業も発展・継続させ、新たな防災教材の製作やＷｅｂサイトでの情報発信などを行い、防災教育の推進役となる。今後も「商業」と「防災」を掛け合わせて、「半商生だから、できること。」を合言葉に、様々な活動に取り組んでいきたい。

④　北海道滝川高等学校

プラン名　豪雪地帯の危険回避に向けたＧＩＳの活用

プランの対象　一般市民

所在地　北海道滝川市

―プランの目的・ここがポイント！

- 生徒自身が生活者の視点で地域を見ることができるようになる
- 行政とコラボレートし、協働でまちづくりを考える
- 携帯電話とＧＩＳを使ったシステムを構築する

―プランの概要

① 滝川市土木課が行政機関として必要な除排雪の不十分な地点を、生徒が調査員となりチェックする。
② 生徒は自分の携帯電話を使い、滝川市内の除排雪の不十分な地点を写真撮影し、その位置情報を含め学校に報告する。
③ その情報を集約し市役所にメール送信する。市役所は状況を確認し、その後の適切な措置を行う。

―期待される効果・ここがおすすめ！

- 小学生やお年寄りに対して、より安全な道(歩道)の情報を提供することで、防犯や交通事故防止につなげることができる。
- 冬期間の緊急車両の通行がスムーズに行われる町づくりを考えさせることができる。

―成果として得たこと

① 滝川市の除排雪のシステムを知ることができた。
② 行政の除雪の観点と市民の感覚のズレを再認識できた。
③ 除雪が普段行われない歩道があることがわかり、それを小学校に伝えることで、防災・防犯に役立てられる。
④ データを整理することで、除雪以外の危険地帯(落雪の危険など)がわかり、その対策を市役所との連携により提案することができた。

―全体の反省・感想・課題

① 「地図太郎」で、データを処理する際に不具合が起こり、リアルタイムのデータを市役所に提供できなかった。
② 調査員となる生徒の中にデータの送信を間違える者がいたことにより、データ処理に手間取った。
③ このシステムを応用することで、防犯マップの作成など地域に役立つ他の取り組みにも使えると感じた。

―今後の継続予定

今後も除雪調査については継続して行う予定である。毎年、少しずつでも調査方法を改善し、自分たちの生活するマチを少しでも住みよい環境にしていきたい。

2011 年度防災教育チャレンジプラン

⑤　「やさしい日本語」有志の会

プラン名　「やさしい日本語」から防災教育へ

プランの対象　ボランティア日本語教師、市民ボランティア、国際交流団体職員

所在地　京都府京都市

―プランの目的・ここがポイント！

日本に住んでいる外国人の多くが、災害時に「災害」と「正確な情報を得られない」という二重の被災者になります。「やさしい日本語」有志の会は、一人でも多くの外国人も災害時に助かってもらうことを目的に、外国人に一番近い存在であるボランティア日本語教室を中心として防災教育の啓発活動に取り組んでいます。

―プランの概要

①ボランティア日本語教室での防災教育の実施を呼びかけ
②その防災教育に役立つ教案の作成、ツールの開発、他団体での防災教育の事例等情報提供
③在住外国人のための「防災グッズ展示会」の実施、防災訓練の企画・運営協力
④日本人に災害時の外国人の状況等を理解してもらうための「やさしい日本語」ワークショップ
⑤防災ホイッスル募金（東日本大震災への募金とホイッスルの共同購入のコラボ）

―期待される効果・ここがおすすめ！

防災教育ツールの「防災グッズカード」は日本語初級レベルでも防災教育ができるよう、防災グッズのイラストと「やさしい日本語」の解説を付けました。現在100セットの無料配布とWebからのダウンロードで、全国的に防災教育の実施を呼びかけることができます。

また、「やさしい日本語」ワークショップは多くの地域住民や行政に、災害時に外国籍住民がどのような状況に陥るのか、私たちに何ができるのかを「気づき」、「行動」してもらうきっかけとなります。

―成果として得たこと

「防災グッズカード」作成においては、カード選定、「やさしい日本語」や外国語の翻訳、試作版の使用報告など、京都にほんごRings(京都府下のボランティア日本語教室ネットワーク)にご協力いただき、このこと自体も啓発活動となりました。また、２回の「外国籍府民のための防災グッズ展示会」は、防災グッズの実物を見て、触ってもらう機会を提供できただけでなく、新聞やNHKへの取材につながりました。さらに「災害多言語支援センター設置・運営訓練」（京都府国際センター主催、近畿地域国際化協会連絡協議会が共催）では、企画・運営段階から協力し、外国籍府民をはじめ、一般市民や国際交流団体職員も含めた大きな防災訓練も行うことができました。

―全体の反省・感想・課題

これまで私たちは「外国人は地震について知識がなく、防災の準備をしていない」ということを大前提に活動をしてきましたが、東日本大震災以降、防災に関心を持っている外国人も多くいます。今後、継続的に防災教育を実施していくためにも、改めて外国籍住民の防災意識の実態を把握し、その上で必要な防災教育を考えるべきだという課題を見つけるに至りました。

―今後の継続予定

「防災グッズカード」は配布で終わるのではなく、配布先に防災教育の実施報告をお願いしています。つまり、カードの配布をきっかけに、その団体との「つながり」を築いていきたいと考えているからです。私たちは今後も「やさしい日本語」ワークショップや日本語教室で役立つツール作成など、様々な活動に取り組んでいきますが、こうしてつながったボランティア日本語教室との情報交換やWebへの掲載、定期的な情報提供こそが、継続的な防災教育の実施につながるのではないでしょうか。こうした活動を通じて、今後も防災教育の啓発活動に貢献していきたいと考えています。

⑥　みえ防災コーディネーター･三泗ブロック

プラン名　ぼうさい・どなべ　「 炊き出し君 」

プランの対象　小学校中・高学年 一般の部

所在地　三重県四日市市

―プランの目的・ここがポイント！

1．学校教育の中で「つくる」「食べる」体験を楽しさを通して、防災を体験的に学習する。
2．災害のイメージや減災への創造力を培い、『自分を守る力』『生きる力』『助け合う力』を身につけ防災の担い手を育成、拡げる。

―プランの概要

1．小学生を対象に、地元四日市の特産品「万古焼・土なべ」を活用し、防災学習を90分の『炊き出し』体験学習を保護者を交えて実施する。
2．子ども達デザイン・絵付け「土なべ」使用「水加減・火加減」という先祖の知恵を伝承する。
3．米の浸し時間、蒸らし時間利用、映像・クイズなどで災害を知り、備えの重要性を学ぶ防災学習
4．子ども達の体験を家庭、地域で話し合ってもらい防災力向上に寄与を期待し、育成する。

―期待される効果・ここがおすすめ！

1．子ども達の参加により、広く地域防災コミュニティづくりに期待できる。
2．小さな「土なべ」を使用することで、災害時に隣近所、小さな単位で「食」を確保協力する防災コミュニティづくりにつながる。
3．小さな単位でつくることで、アレルギー食や病人食、高齢者対応など、災害時要支援者対策につながる。

―成果として得たこと

1．学校関係者の認識・意識・理解が変わった、更に学校・父兄・地域との連携に貢献できた。
2．子ども達の防災意識の向上に貢献（感想文より効果がよみとれる）
3．家庭・地域の防災力向上と、新しい環境作りに貢献。
4．父兄や地域との一帯、共同事業として、キッカケつくりに貢献。

―全体の反省・感想・課題

1．食は基本なので、切り口として防災を学ぶことは非常に効果的。
2．食を通しての地域防災コミュニティづくりのｷｯｶｹ提起
3．平常時訓練で地域防災コミュニティづくりに貢献
4．どこでも導入可能プランなので広く広報実施を提案する
5．地域コミュニティづくりに貢献大なので自治会などへの波及、発展を図りたい。
6．全員参加型訓練体験メニューと自負していて、楽しく豊かな地域のつながりなると確信している。

―今後の継続予定

1．次世代リーダー育成、世代間交流、地域防災コミュニティづくりと充実のためにも、継続事業として定着させたい。
2．総合学習の中で、防災のとりくみ、備えの重要性からも、継続、定着プランとなることを期待する。
3．学校との連携、学校を含めて地域との連携を拡げ、重大災害を乗り切る地域力養成

2011 年度防災教育チャレンジプラン

⑦　新潟県立柏崎工業高等学校

プラン名　俺たち柏工防災エンジニア

プランの対象　防災エンジニアコース生徒３年２年

所在地　新潟県柏崎市

―プランの目的・ここがポイント！

（Ⅰ）津波・原子力・避難経路・海抜によるハザードマップづくり
（Ⅱ）高輝度蓄光材を用いた防災用品・用途の開発
（Ⅲ）被災地へのボランティア

―プランの概要

柏崎工業高校防災エンジニアコースは防災教育がカリキュラムに直接取り入れられている。上記の全ての活動を通じて、防災に関する様々な諸問題を考え知識を深めていく。取り組みは１年間を通じて実践される。

―期待される効果・ここがおすすめ！

（Ⅰ）ハザードマップは製作過程において、調べ学習や地域調査が含まれるため防災問題を考える上で学習効果が高い。製作途中で新たな発見や要求がどんどん高まるので発展性が大きい。
（Ⅱ）防災用品や用途開発においては、商品という観点を意識したので単に防災の効果が高いとかだけでなく何故良いものが広まらないのか？売れない理由は何か？といった拡大させるための要素といった問題まで考えることができる。
（Ⅲ）ボランティア活動の実践は防災を考える上で欠かせないテーマである。体験することでしかわからないことは極めて多い。

―成果として得たこと

ハザードマップを製作することで柏崎市の諸問題に真剣に取り組むことができた。防災まちづくりのために必要な学習にもなった。防災用品・用途開発では良い製品・良い提案だからといって、それが商品として成り立っていかないことや自治体でも採用できない理由がある現実を知ることができた。防災の取組を広く世間に受け入れてもらったり、良い商品がヒットするということは単純でなく経済面や社会的コストとも大きく関係している。「防災教育を広める」という問題を新たに知ることができた。ボランティア活動は身近で小さなことでも必ず大きな発見を生みだすことが判った。参加することで満足度もあがり、モチベーションの向上にもつながった。結果、保護者も巻き込むことができた。

―全体の反省・感想・課題

本校の場合、授業で防災問題を学習しているためやや理屈っぽくなり、学習と課外活動とがやや噛み合わず、それぞれが単発的な取組になっている感じになりがちである。まだまだ始まったばかりの活動なので、これからはそれぞれの活動が本校のカリキュラムの何を具現化しているのか、明確になっていくことが課題である。

―今後の継続予定

これからも学校が続く限り防災教育は継続されます。今はまだ手探り状態で、各種活動がどのように本校の防災エンジニアコースのカリキュラムに最適なのかまだまだ解答は得られていません。防災教育は知識の積み上げだけは非常時に対応できないことを知りました。これからも柏崎市と連携を深めながら「防災マインド」の育成を目指し、新潟県だけでなく全国から防災エンジニアとして認められるまで頑張りたい。

⑧　八女市上陽防火委員会

プラン名　八女市上陽防火委員会総合訓練

プランの対象　幼稚園、小学校高学年中学生、地域住民

所在地　福岡県八女市

☆☆☆

―プランの目的・ここがポイント！

・従来の防火委員会各クラブ単独で行っていた活動から、各クラブの統合した訓練や、地域住民を巻き込んだ活動を通じて多世代間のコミュニティを図る。
・町伝統行事への参加を通じ、郷土愛を育むと同時に継続した活動を維持する。

―プランの概要

・地元消防団や自衛消防隊と少年消防クラブ員が町を歩き見聞を行い、防災マップを作成し町の実態・特徴を知る。
・町伝統行事の万灯流し(精霊流し)にむけ、関係者と協力した竹灯籠づくりや会場の設営を行う。
・町伝統行事の上陽祭り(全日本きんま選手権大会)会場で、婦人防火クラブ員と共同した炊き出し(おしるこ・豚汁)を行い来場者へふるまいながら防災 PR を実施する。

―期待される効果・ここがおすすめ！

・オンリーワンの防災マップを作成し各家庭で発表させ、提示することにより、クラブ員から家族へさらには、地域住民へと防災意識の高揚を広げていくことができる。
・各活動に関わる年齢層に厚みを加えたことにより、地域コミュニティの中にも新たなコミュニティが生まれる。
・少年消防クラブ員各個に自分達が住んでいる町を支えていくために必要な小さな役割を身につけさせ、地域社会を築くために必要な一歩を踏み出すことができる。

―成果として得たこと

・町歩き防災マップ作成を通し、地形・建物・人・災害等の特徴を知り、防火防災意識の普及啓発が図られた。
・多世代間の交流から信頼関係・共同意識・互いの連帯感等が深まった。
・幅広い年齢層の中で、会話ができるようになった。

―全体の反省・感想・課題

・より充実した活動をするためにアドバイザーの派遣を利用するべきであった。
・チャレンジプランに参加して、防火委員会の活動の幅が広がり、効果の上がる防災教育指導のやり方を学ぶことができた。
・今後もチャレンジプラン（他団体の活動等）を参考にして、地域のさらなる自主防災力向上にむけた活動を行っていきたい。

―今後の継続予定

・他の地区の防災マップ作成
・地域行事・祭りへの参加
・防災訓練

2011 年度防災教育チャレンジプラン

⑨　東京都立田無工業高等学校

プラン名　生徒全員が防災ボランティアを目指し、地域と取組む防災町づくりの意識を広げる。

プランの対象　生徒・地域住民　　**所在地**　東京都西東京市

☆☆☆

―プランの目的・ここがポイント！

「西東京消防署及び地域防災ネットワークと連携し、防災ボランティアの育成・防災ネットワークづくりに協力する。」

①工業高校の特性を活かして、西東京消防署の協力により、災害時に必要な防災技術講習会を実施。

②災害の悲惨な状況を受け止めながら、１学年から文化祭などを通して防災・減災の町づくりに取組む。

―プランの概要

- 体験学習の前後には、事前・事後学習を行い、防災に関する知識を習得する。
- 救助器具取扱い訓練では、チェーンソーや削岩機、油圧ジャッキを使った救助訓練を行う。
- 普通救命講習では、心肺蘇生法や AED 使用技術を学習。
- 文化祭で東日本大震災に関する作品展示や研究発表を行う。

―期待される効果・ここがおすすめ！

たとえば、ＡＥＤ、動力可搬ポンプなどの使用法は、「やったことがある」は、災害時には、大変大きな力となる。生徒全員が「防災ボランティア技術講習会」へ参加することにより、困っている人を自発的に助けようとする気持ちがおこる効果が期待される。また、一人ひとりが、やがて防災まちづくり、防災地域づくりを具体化しようとするネットワークづくりの基礎となる効果もあると考えられる。

―成果として得たこと

- １学年全員で参加することで、生徒全員が高い防災意識をもって進級していく。
- 文化祭で展示した陸前高田市の地形の模型は、達成感があった。東日本大震災に関する研究発表も非常に好評だった。
- チェーンソーで切断する木材を地域のお風呂屋さんから提供していただいたことで、地元の商店街ともつながりができた。

―全体の反省・感想・課題

- 例年参加している西東京市総合防災訓練は、生徒全員に訓練の中の役割を課保するのは難しい。奉仕の授業としてはすべての生徒が活躍できるようなメニューを考案しなければならない。
- 様々なアイデアが年度途中で浮かんだが、学校として動くには難しいことを痛感した。

―今後の継続予定

- 来年度以降も防災体験技術講習会を実施する予定。
- 地域の自治会、老人ホーム、小学校などと連携し、災害時に備えて避難訓練や防災技術訓練に参加してもらう。
- 防災体験技術講習を通して、地域住民だけでなく商店街の方々とも密接な連携をとって、地域に根ざした学校づくりができると考える。

⑩　茅ヶ崎トラストチーム

プラン名　茅ヶ崎まるかじりプロジェクト　『The サバイバル 2011』

プランの対象　保育園・幼稚園 ～大学・一般の部

所在地　神奈川県茅ヶ崎市

☆☆☆

―プランの目的・ここがポイント！

①『浜っ子パーク』で楽しみながら、協力・助け合い・分け合い・自分で考えることを経験する。
②大人は支援する側として、子どもとの距離を測りながら、自らも学び、協力することを経験する。
③『浜っ子パーク』での経験をいかし『The サバイバル2011』は、子どもたちの活動を行っている他団体と緩やかにつながり、地域の防災力向上の機運を高める。

―プランの概要

①毎月1回土曜日に開催する体験遊び場『浜っ子パーク』を防災要素を盛り込んだ内容とする。
②『浜っ子パーク』の案内チラシ（７３０世帯）にも防災・減災についての内容を盛り込む。
②「Theサバイバル2011」に向けたワークショップの実施。
③体感と対話をテーマとした防災・減災イベント『The サバイバル2011』の実施

―期待される効果・ここがおすすめ！

①活動場所は避難所となる学校の校庭。新たに防災視点で校庭を観ることで、人々の不安の軽減に繋ぐ。
②いつでも、誰でも、どこからでも参加できる、間口の広い防災訓練
③学校の避難訓練、地域で行う避難訓練、スポーツ団体の安全対策などの情報をまずは集めることから始め、情報共有の機運を高める。

―成果として得たこと

①五感とからだで、リスクを体感
・豪雨にもかかわらず８０名もの参加者。思った以上に関心があると感じた。体感する　という狙いが伝わったということが、子どもたちの声から感じられた。「５mって結構高い。距離で見るのと違う。」「５分って思っていたより短かった。」「楽しかったけど、何も見えなかったら怖い。」
もし、自分一人の時に災害が起こったら、と自分の身に置き換えて考えるきっかけとなった。
②ゆるやかなネットワークの構築
・「Theサバイバル2011」実行委員会を立ち上げ、多様な立場の人との連携がとれた。
・地域団体をはじめ、多くの団体の後援や協力を得ることができた。
③メディアによる紹介
・多くの人に活動の内容を知ってもらうことができた。

―全体の反省・感想・課題

・専門家の知識を活用するまでにいたらなかった。

―今後の継続予定

①情報共有の「場」としての「浜っ子パーク」の継続。
②防災・減災イベントを通しての、率先市民の育成。
③防災・減災イベントのパッケージ化。

2011 年度防災教育チャレンジプラン

⑪　高津養護学校 たかつ地域ネットワーク推進会議

プラン名　たかつ　地域との協働による
障がい者・高齢者等要援護者支援のための防災シミュレーション訓練

プランの対象　障がい児者・高齢者
地域住民・ボランティア

所在地　神奈川県川崎市

☆☆☆

―プランの目的・ここがポイント！

5年目を迎える障がい児者や高齢者等災害時要援護者と地域住民（町会・自治会）協働のぼうさいシミュレーション「避難所設営訓練」。訓練を通し障がいのある児童生徒の防災意識を育てるとともに社会参加への機会とする。また、学校と地域との協力・協働による訓練をとおして、障がい者や高齢者等要援護者に配慮した避難所設営や運営のあり方を探りたい。さらに、障がいがある児童生徒と地域住民との交流の機会とし、障がいの理解推進や学校理解を図り地域コミュニティ活性化の一助としたい。

―プランの概要

- 障がいのある方の保護者や支援者向け学習会の開催（３回）や夜間避難所設営体験の開催
- 防災ボランティア養成講座とぼうさいシミュレーション（避難所設営訓練）の開催
- 保護者・支援者のための「地震防災ガイド」や地域向けぼうさいカレンダーの発行
- 地域向け防災対策事業実践発表会や防災講演会の開催

―期待される効果・ここがおすすめ！

〇地域住民と障がい児者など要援護者協働による訓練であること
〇具体的な場所（学校体育館や教室）を使用した避難所設営訓練であること
〇地域町会や自治会とボランティア団体・学校が連携・協力した訓練であること
〇災害時の障がい者等要援護者支援を目途とした実践的な訓練であること

―成果として得たこと

- 地域行事と重なった日程になってしまったが一定の参加者（90名）があった。
（児童・生徒と保護者30名,地域の方20名,行政や関係機関10名,教職員20名,ボランティア10名）
- 事前の学習会に例年以上の参加者があった。（4回のべ140名、昨年90名）
- 地域の障がいのある方を支援する民生委員や懲戒役員が多く参加していただいた。（15名）
- 要援護者支援を目途とする防災訓練が近隣の他地域でも開催されるようになってきた。
（川崎市高津区、横浜市都筑区、相模原市、平塚市等）
- 地域行政の協力が昨年に続き、得られた。（川崎市高津区協働事業）
- 要援護者支援の技術として、特別支援学校の教育力が実践的に生かされる機会となった。
（避難所開設後の聞き取り調査や足湯の工夫など）
- 支援者向けの「地震防災ガイド」を昨年に続き発行できた。
- 訓練の継続が地域から期待されている。

―全体の反省・感想・課題

- 地域行事と日程が重なり、参加者が例年に比べ少なくなってしまった。（120名→90名）
- 発達障がい者の避難所での困難性について参加者に理解がすすんだ。
- 障がい者施設等の職員との連携を深める必要を感じた。
- 特別支援学校の支援技術が生かせるような訓練をおこなっていく必要がある。

―今後の継続予定

・ 地域の期待感を強く感じた。実施主体をボランティアや地域に移管するなど、今後も実施内容を精査しながら、参加しやすい訓練も目指し、地域と協働・協力しながら継続できればと考えている。

⑫　千葉県立東金特別支援学校

プラン名　防災発信・防災交流～北之幸谷から二市四町へ～

プランの対象　小中高の児童生徒 保護者・大学・一般

所在地　千葉県東金市

―プランの目的・ここがポイント！

○ 合同防災訓練を行い、地域と一体となって防災に対する意識を高める。
○ 講演会や防災安全マップの作成等を通して、地域との情報の共有を図る。
○ 授業を通して、障がいのある児童生徒に対する防災教育のポイントを探る。

―プランの概要

地域の自治会やボランティア部会、長寿会等と特別支援学校との夜間を含めた合同防災訓練を行うことで、地域と一体となって防災に対する意識を高める。生徒会を中心に防災安全マップの作成をしたり、講演会で地元災害の歴史等を学ぶ機会を設けたりして情報の共有を図り、防災について得た情報を学区である二市四町（東金市、山武市、大網白里町、九十九里町、横芝光町、芝山町）に発信していく。また、日々の授業を通して、障がいのある児童生徒に対する防災教育のポイントを探ったり、障がいに応じた防災用具の開発に取り組んだりする。

―期待される効果・ここがおすすめ！

「防災ユニバーサルねっと」の構築に向けての取り組みを通して、ネットワーク作りの広がりと深まりが期待できる。「防災マルチパーテーション」の作成と活用を通して、有事の際に自分たちが作成した物が、地域のために役立つという役割意識の高まりが期待できる。

―成果として得たこと

地域との合同防災訓練や炊き出し体験では、地域の方より、「落ち着いて行動していて感心した。」「机の下にすぐにもぐっていた。また、私が入るために、椅子を出してくれた。」という感想をいただいた。児童生徒からは、「地域の方と関われてよかった。」「今後、地震や津波が起きた時に、今日のこの経験を活かして炊き出しなどができるとよいと思います。」 という感想があった。双方から、『また一緒に活動をしたい』という感想があった。合同防災訓練で本校に来ていただいた長寿会の方が、本校の学校祭である「やまもも祭」にも参加していただけた。お互いの名前を覚えて、あいさつを交わし、握手で分かれる交流が実を結んだと感じる。

―全体の反省・感想・課題

障がいの有無に関わらず、防災教育のポイントは、「命を守る」力を育てることと捉え取り組んできた。自分で自分の身を守るために必要な知識の獲得と実際的な経験を積み重ね、次にどうしたらよいかを考え判断する力を身につけ、そして、身近な人を気にかけ、一緒に行動し助け合う気持ちを育むよう実践を積み重ねた。

―今後の継続予定

「防災マルチパーテーション」について、幼稚園等からの問い合わせがあった。学区の幼稚園や小学校、地域の公民館等へも普及できるように改良をしていきたい。「防災ユニバーサルねっと」の構築に向けて、山武郡市（学区の二市四町）の行政機関である千葉県山武地域振興事務所や要援護者支援に携わっている山武圏域地域自立支援協議会等をつなぎ、ネットワークの広がりや強化を進めていくとともに、障がいのある児童生徒に対する防災教育を推し進めていきたい。

2011 年度防災教育チャレンジプラン

⑬　千葉県立姉崎高等学校

プラン名　今年は防災で連携！京葉工業地帯の地震防災に学校・地域の連携で立ち向かう

プランの対象　本校生徒・職員・保護者・地域住民・企業・大学・市原市

所在地　千葉県市原市

―プランの目的・ここがポイント！

「地域連携」をキーワードにして，「地域との連携を深める防災教育」のあり方を考える。

1　学校の危機管理，企業の危機管理，病院の危機管理，地域の危機管理の連携と合同防災訓練等により，地域で共有できる新しい危機管理意識の構築を目指す。

2　防災教育を通して自助・共助・公助において学校と地域が連携した防災体制の整備を目指す。

―プランの概要

1　地域と連携し大規模災害に立ち向かうための知識や能力を体験学習を通して学ぶ。

2　大規模災害発生時に高校生は，共助の担い手として，必要な知識や能力を習得させる。

3　地域のネットワークの構築・強化を図り防災意識の啓発・研究・広報活動を推進する。

―期待される効果・ここがおすすめ！

1　高校生は，共助の担い手として災害発生時の行動に必要な知識や技能の習得ができる。

2　災害発生要因を地域住民と共有することで，素早い避難や救助・安全対応が可能になる。

3　災害被害時に高校生として地域のために何ができるかを考えさせ防災意識を高める。

4　千葉県総合教育センターとの連携により本プランの成果及び活用についての周知ができる。

―成果として得たこと

1　防災教育を学ぶことによって，学校だけではなく地域を巻き込んで学習する機会ができ，自助・共助の意識を持つことが出来た。

2　災害のイメージを意識し，高校生が主体的に関わるボランティア意識を持つことが出来た。

3　地震に関する基本的な知識や防災対策等の基礎的技術の取得が出来た。

―全体の反省・感想・課題

1　この１年限りの計画ではなく，継続的な防災教育計画を立てる必要がある

2　今年学習した防災に関する技術や知識を継承して広める機会を作ることが大切である。

3　防災だけではなく，今以上に地域と連携した学校づくりを進める必要がある。

―今後の継続予定

1　来年度から備蓄食糧を全校生徒・職員分を用意する。

2　今年度の成果を３月に全校生徒に防災委員の生徒が発表する

3　家庭科の授業に非常食作り実習を取り入れる。

4　校内防災訓練に今年度行った多様な訓練を取り入れる。

5　これまで行われてきた地域との連携を更に深める。

⑭　秋田県大館市立第二中学校

プラン名　㋐んぜんで　㋕さしさ　㋜ぐる　「アヤメの里」の防災教育

プランの対象　中学生、保護者、地域住民

所在地　秋田県大館市

―プランの目的・ここがポイント！

・大地震発生後の被災状況を把握させるとともに、中学生としてできる地域での防災活動や防災訓練などに積極的に参加する意識を高め、自他の生命を尊重する態度を養う。
・通学路を中心とした地域における地震発生時に起こりやすい危険箇所に気づき、どのような対策を立てたらよいかなど地域防災マップを活用して、具体的に行動に結びつく力を身に付ける。
・災害時の自分自身の安全に加えて、災害時の被害者の救出や地震後の火災発生防止など二次災害を防ぎ、家庭や地域の人々の安全を守るために必要な事柄を取り上げ、理解できるようにする。

―プランの概要

・生徒会の活動を中心に、町内会長連絡協議会等、地域の協力を仰ぎ、地域防災マップを作成して、ＤＶＤに収録し地域に配布するとともに、学校や公民館のホームページにも掲載する。
・生徒、教師、保護者や地域住民の参加による心肺蘇生法の習得とＡＥＤを含む救急救命講習、避難訓練、防災教育講演会を実施する。

―期待される効果・ここがおすすめ！

・防災教育による生徒一人一人の実践的対応能力の向上
・自分たちの地域は自分たちで守るという地域ぐるみの防災意識の高揚
・大規模な災害時に何ができるのか、何をするべきなのかについて考え、行動できる人材の育成

―成果として得たこと

・生徒の防災に対する意識が高まり、災害弱者などの人を思いやる気持ちが育ってきた。
・生徒が地域に目を向け、地域の一員であることを自覚し、地域と共に活動する意識が高まった。
・災害に対する備えを充実させるなど、地域の方々の防災意識が高まった。

―全体の反省・感想・課題

・防災学習の日に地域の方たちとともに危険箇所を確認したり、小学校で地域防災マップを解説し集団下校を行ったりそのほかの活動にも地域住民を巻き込んだことなどが、好評を博しており、様々な教育効果が生まれたと感じている。
・課題としては、生徒が防災についてのアイディアを出したり、避難訓練の計画・立案などしたりするなど、より主体的で実践的な活動をしていくことが必要だと感じている。また、校内の組織を充実させ、今まで以上に全職員で取り組むプランにしていきたいと思っている。

地域の方たちから学ぶ

―今後の継続予定

今年度の取り組みをもとに、中学生が地域の防災リーダーとなることを目指し、さらに積極的に活動できるよう、次のように計画している。

１　冬季の防災に重点をおき、積雪時の危険箇所の確認などを含めた地域防災マップのバージョンアップを図る。
２　大規模な災害が発生した際に、自分たちの学校が避難場所になることを想定し、学校施設における備え、地域住民の避難場所の利用法、中学生の参画の仕方を考える。
３　市内にあるリサイクル施設の災害に対する役割を理解し、放射性物質等の処理問題についての安全性を明らかにする。

2011 年度防災教育チャレンジプラン

⑮　宮城県大河原町立金ヶ瀬中学校

プラン名　学校と地域が協働する防災対策活動プラン

プランの対象　中学生、公民館、行政区長、学区内地域一般住民

所在地　宮城県大河原町

―プランの目的・ここがポイント！

本校のある地域は高齢化と核家族化が進み、住民間の絆が薄れていくことが懸念されている。この中で地域の防災力を高めていくことが課題であり、目的である。本校の中学生が中心になって活動する防災教育実践を、地域住民を巻き込む活動に発展させ、学校・生徒と住民間の協働体制にしていくことを、目的とし、持続可能な地域社会づくりを目指すプランである。

―プランの概要

・中学生が中心になり地域と協働する地域防災訓練の実践

・地域住民による学校支援組織「金未来隊」の設立

・多彩な団体・機関等を巻き込む教育実践の拡充と発展

・プランの重要性を積極的に外部に発信・広報する活動

―期待される効果・ここがおすすめ！

地域住民との「かかわり」・「つながり」が継続・拡充し、持続可能な地域社会づくりとその活性化を推進でき、地域防災力の向上が図れる。

―成果として得たこと

・中学生が主動する、震災復旧支援活動や防災教育活動の糸口となった。
・学校と地域、地域住民間の協働体制が構築できた。
・本校が地域の避難所として行うべきことが明確になり、学校・地域の防災対応機能が向上するきっかけとなった。
・３月の大震災を経験したことで、生徒、地域住民の防災に対する意識が高揚した。そして、地域防災への関心と意欲がさらに高まった。
・避難所の機能拡充策として可動式の「どこでもかまどベンチ」を作成したことは防災設備としての機能を十分に果たすのはもちろんのこと、他に、防災意識の向上に役立った。

―全体の反省・感想・課題

２年続けて、地域防災訓練を金ヶ瀬地区一斉に行えたことは有意義で大きなことだった。行政区長や公民館長からも是非続けていってほしいと要望があり、地域住民との「かかわり」「つながり」がもて、持続可能な地域社会づくりの足がかりができたと感じる。今後は、避難所としての機能拡充と地域主体の防災への架け橋として、備蓄食料の調達ができるかどうかが課題と言える。

―今後の継続予定

学校支援組織「金未来隊」による協働教育体制の構築を進め、次年度も地域防災訓練を継続するとともに学校主導から地域主導の訓練になるような体制づくりを進めていきたい。

⑯　釜石市立釜石東中学校

プラン名　ＥＡＳＴ－レスキュー

プランの対象　生徒　１８７名
地域住民

所在地　岩手県釜石市

－プランの目的・ここがポイント！

２０１１年３月１１日の東日本大震災では、これまで防災学習に取り組んできたことが功を奏し、生徒は自分の命を自分で守ることができた。

今年は、災害に負けない自分作り、自分自身が元気になることを第１に取り組んだ。次に、学校全体が元気になる行事に取り組んだ。最後に、地域が元気になれるように、感謝の気持ちを込めた行事を行った。

「助けられる人から助ける人へ」を合言葉に、国内外の人から支援を受け、元気になってきた釜石東中学校です。

－プランの概要

①元気になり隊（助けられる人）　②元気を届け隊（助ける人）
③防災（復興）ボランティースト　④感謝の気持ちを形にして表す
⑤めざせ！ＥＡＳＴ－レスキュー隊

－期待される効果・ここがおすすめ！

１　自分の命は自分が守る
２　助けられる人から助けられる人に成長する
３　「命てんでんこ」を継承する
４　地域と共に防災教育を推進する

－成果として得たこと

１　生徒は自分で自分の命を守ることができた。率先避難者になった。
２　防災学習が災害当日大きな力となって働き、小学生の手を引いて避難することができた。
３　「安否札」が活用された。住民の避難意識を高揚させ、玄関に掲示しておくことにより、人命救助につながった。
４　普段の取り組みが大切であることを痛感した。小中合同の避難訓練や避難訓練のマニュアルのとおりに動いていること。「奇跡」は偶然の産物ではない。
５　地域とのつながりは、「絆」。日常において構築しておく。
６　防災教育は、「人作り」。たくましくも優しい人作り。

－全体の反省・感想・課題

ささやかな防災教育・防災学習ですが、継続していてよかった。２０年後、５０年後も見据えて、語り継いでいきたい。

地域とのつながりを「安否札」で行っていたものを、今年は「笑顔袋」に変え、活動した。

日常の取り組みを真剣にすることや自分の命を大切にすることで、今後の釜石の復興に携わる大人（生徒）にしたい。

－今後の継続予定

平成２４年４月には、仮設校舎が小中学校同じ敷地に完成する。
小中学校と地域がともに活動できる防災教育の視点で、これまでと同じように活動する予定。
将来的には、また津波が襲来するであろうが、今度こそ、「避難して全員無事」「死者０の町作り」を目指して、「助けられる人から助ける人へ」を合言葉に活動を再開したい。
釜石が、岩手県が、東北が立ち上がることをずっとずっと応援してください。

2011 年度防災教育チャレンジプラン

⑰　南三陸町立歌津中学校

プラン名　地域を愛し，南三陸の防災を担う歌中生　～「結いっこ」の精神を生かして～

プランの対象　中学生，教職員 保護者，地域住民　　**所在地**　宮城県南三陸町

―プランの目的・ここがポイント！

ふるさとの防災を担うべく，「津波（災害）に強いまちづくり」を目指して，中学生が様々な訓練や体験などの学習活動を行い，地域の防災力向上に貢献することがプランの目的です。しかし，３月の津災（津波による災害）を受けたことによって，生徒たちの心のケアや津災時の本校の教育活動の記録を残すこと，さらには，中学生が出来る地域貢献などの活動も行っていきます。

―プランの概要

- 歌中夏祭り ……生徒たちが企画して，犠牲者の鎮魂と被災地域住民を励ますお祭りを実施しました。
- 少年防災クラブの活動 ……全校生徒が加入する少年防災クラブを発足させ，自らの命を守る避難訓練，仮設住宅の防火訪問や火災予防ポスターの制作などの活動を行いました。
- 総合的な学習の時間の授業 …津波襲来時の避難について考えさせる授業を行ったり，未来の歌津の姿や復興について考えさせる授業を行ったりしました。
- 生徒の心のケアの実施 ……生徒の心のケアを行う職員体制を整えました。
- 津災の記録文集の制作 ……津災があった年の歌津中学校の記録を残していきます。
- 生徒の学習と生活の支援 ……生徒の学習支援や生徒を含む家族の生活支援を行う教職員の体制を整えました。
- 教職員の研修 ……救急救命法の講習会や，講演会などの研修会を実施しました。

―期待される効果・ここがおすすめ！

津災を受けて，生徒，保護者をはじめ，この地域に住む人は誰であっても，防災教育の重要性を強く感じています。今こそが，地域の防災力を向上させる絶好の機会です。この機を逃さずに，様々な仕組みを作って，このまちを津波に強い，災害に強いまちにして行かなければなりません。この地域の子どもたちが必ず入学する歌津中学校に，卒業するまでに生徒全員が防災について学ぶ仕組みをつくり，学校が地域防災における人材育成の拠点的な役割を担い，学校と地域社会の橋渡しを行っていきたいと考えています。そのような仕組みをつくり，後世に残すことがこのプランの根幹であり，チャレンジです。

―成果として得たこと

一番大きな成果は，地域のために何かしたいと話す生徒が数多く見られるようになったことです。津災当初は，自らの身に何が起こったかも良く理解できずにいた生徒たちでしたが，自分たちの生活を立て直すには，自分たちも何か役割を果たしたいと考えるようになりました。そのように考えるようになったのは，地域の方々を励まそうと生徒たちが企画した「歌中夏祭り」で，多くの生徒が感動を味わったことがきっかけとなっています。「歌中夏祭り」が行われたころから，多くの生徒が前向きな発言をするようになりました。また，少年防災クラブの活動によって，災害に対する意識が高まったことも，生徒たちに積極的な行動を起こさせています。自ら率先して，規律訓練やポンプ操法の訓練に参加したり，休日に仮設住宅への防火訪問に参加したりする生徒がありました。このような活動の延長上に，このまちの地域力の向上や将来の防災力の向上があるのだと考えます。さらに，学校で津災時対応として行って来た生徒の心のケアや生徒への様々な支援などの教育活動を記録に残す事によって，今後，災害時における学校運営の参考にしていただけるものと考えます。

―全体の反省・感想・課題

津災後，本校の学校再開は５月１０日にずれ込みました。これによって，津災前に立てた本校のプランの日程と内容は大幅な見直しが必要となりました。総合的な学習の時間の時数も前年度より大幅に減りました。このような変化に対応するには，長期休業等を活用した活動を，計画的に行う必要があると考えます。また，防災教育と教科等との関連を整理し，教科等の中で，防災教育を行っていくなどの方策を模索しなければならないとも考えます。また，図らずも今回の津災によって防災教育の実践の機会を得たとの考え方もありますが，生徒の生命や身体的かつ精神的な負担を考えると，災害時の活動は率先避難の実践や物資の運搬や配布くらいにとどめておくべきと痛感しています。児童・生徒の場合，防災教育の成果はすぐに出ると考えるのではなく，生徒が大人になった時点での防災的実践力を育てるとの考え方に立つべきであると思いました。

―今後の継続予定

生徒1人1人がこの地域の防災の担い手となり，地域の防災力を高めるために，消防署，町役場，消防団，ＰＴＡ，同窓会などの代表者をメンバーとする「防災教育協力者会議（仮称）」を設立し整備していきたいと考えています。この協力者会議において，本校の防災教育の年間計画の概要を決めて，地域の方々に率先して指導者となっていただくようにしていきます。このような形にすることによって，歌津中学校の防災教育が，教育課程の変更などの影響を受けずに，長く継続していくことが出来るものと考えます。また，少年防災クラブ内で資格制度を整備していきたいとも考えています。救急救命法や消火法，避難所で役立つ炊出し訓練などの防災スキルを身に付けるための研修を実施していき，研修を受講した生徒には，資格証を発行するなどして，生徒の学習意欲を喚起していきたいと考えています。

防災教育チャレンジプランに期待する

世界中で大きな災害が頻発しています。東日本大震災では揺れと津波によって死者・行方不明者が２万人に及ぶ甚大な被害が広域に広がりました。その後発生した福島第一原発事故によって安心安全に関する大きな社会的影響が出ています。それ以外にも我が国では９月の台風 12 号による記録的な降雨のため大きな災害が起きました。最近のタイでの洪水は印象に新しいところです。

今回の東日本大震災での被害の出方とそれ続く被災地での回復の試みは、21 世紀前半に発生が確実視されている東海・東南海・南海地震や首都直下地震のような広域にわたる巨大な地震災害を乗り切る上での大きな教訓を提供してくれています。こうした災害に立ち向かう主役は 1980 年以降に生まれた若い人たちです。若い人たちが、自分自身を守り、お互いに助け合っていける力を育んでおくことが、この国の将来にとって不可欠です。これは学校だけの仕事ではなく、学校・地域・家庭が協力してさまざまな試みを重ねていくことが大切です。

今回の被災地には防災教育チャレンジプランの実践団体が 11 ありました。しかし、今回犠牲者が出ることは一人もありませんでした。その一つである釜石東中学校の例に代表されるように、日頃からの防災教育の有効性が証明され、その価値が見直され、防災教育に対する関心の高まりが見られています。こうした素晴らしい成果は、若い人たちの防災に関わる能力の向上を図るための素晴らしいプランをたくさん集め、それらを多くの人々に紹介する「防災教育チャレンジプラン」の取組みの重要性を再確認させてくれました。９回目を迎える今年もプラン募集にあたっては、最近の防災教育への関心の高まりを踏まえて、一つでも多くの団体に「防災教育の実践」を始めていただこうという意図で、「入門枠」を追加させていただきました。

その結果、一般枠 31 団体、入門枠 20 団体、合計 54 団体の応募をいただきました。どれも素晴らしい内容でしたが、予算の制約があり、今回はその中から 31 のプランを選ばせていただきました。防災教育の内容をできるだけ多様にできるプラン、いろいろな場所でできるだけ幅広い層が関われるプランへと成長してほしい「たね」を重点的に選ばせていただきました。選ばれた各団体はいろいろな面で「チャレンジ」し、今後の防災教育を推進する上での共通の資産を増やすために努力をしてください。

今回選ばれた皆さんのプランが今日をスタートとして、１年間の実践を経て大きな実を結び、来年２月の活動報告会に成長した姿で戻ってきてくださることを期待してやみません。

防災教育チャレンジプラン実行委員長
京都大学防災研究所巨大災害研究センター　教授

林　　春　男

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災による未曾有の被害が発生したことを教訓として、これまでの大規模地震・津波対策の大幅な見直しが行われています。その中で自助及び共助を中心とする“地域防災力の向上”は、震災前から重要な課題とされており、震災を通してより浮き彫りになりました。今回の震災において、中学生が小学生の避難を助け、また、中学生等の避難行動がきっかけとなって周囲の住民が避難し、被害を最小限に抑えた事例があるなど、地震・津波に対する防災教育の必要性・重要性が改めて認識されたところです。

また、住民の避難行動を見ると、避難するきっかけとして、地域における避難の呼びかけや率先避難が大きな要因であったことを踏まえ、自ら避難することが地域住民の避難につながることを理解するとともに、共に声を掛け合いながら迅速に避難するなど、地域が一体となり避難することが重要です。

「防災教育チャレンジプラン」の取組は、皆様のご支持を得て、９年目となりました。北海道から九州まで全国津々浦々の地域性を活かした取組に期待しております。今回選ばれた一般枠 18 団体、入門枠 13 団体の皆様には、大いにご活躍いただき、この取組のさらなる発展に貢献していただくことをご期待申し上げます。

防災教育チャレンジプラン実行委員会委員
内閣府参事官（地震・火山・大規模水害対策担当）

越　智　繁　雄

MEMO

2012 年度防災教育チャレンジプラン（一般枠）

【１】　秋田県大館市立第二中学校

プラン名　アヤメの里の防災リーダー目指して
～雨にも負けず雪にも負けず～

応募部門　中学校の部　　**所在地**　秋田県大館市

☆☆☆

―目的・特徴等

雪害に対する知識を深め、雪下ろし等の危険について学び、積雪時の避難訓練など、この地方特有の災害時の対策及び高齢者などの生活弱者の避難について考えるとともに学校が避難所となった際の役割や在り方、備え等について学び、一斗缶を活用して、鍋による炊飯を行い非常時や停電時の炊き出しの訓練を実施する。また、鉱山跡地を活用したリサイクル施設の産業廃棄物や汚染土壌の現状を把握し、放射能等の知識を深め、対応について理解する。

―団体紹介

生徒150名は素直で明るく純朴である。近くには天然記念物の芝谷地湿原がありアヤメが群生し多種のトンボが飛び交っている。地域は鉱山が閉山などで活気が薄れ、少子・高齢化が進みー人暮らしの老人宅も少なくない。あいさつ運動やボランティアの日などを設けて地域と一体となった取り組みを続けている。今年度の防災教育への取組は、生徒たちの防災に対する意識を高め、自他を大切にする心が育ち、地域に目を向け、地域の実情を知る良い機会となった。これまでの活動から得た学びに加えて雪国の防災や汚染土壌からくる災害などの新たなプランに取り組みたいと考えている。

【２】　気仙沼市立階上中学校

プラン名　総合防災訓練「共助」

応募部門　中学校の部　　**所在地**　宮城県気仙沼市

☆☆☆

―目的・特徴等

地元の関係団体や住民の協力を得ながら，災害発生時および発生後の対応について考え，実践させることで，以下のねらいに迫る。

・災害について正しい知識と理解を深める。
・災害発生時および発生後に必要とされる判断・技能を身に付ける。
・災害発生時および発生後に大切な相互扶助の精神を養う。
〇特徴…中学生だけでなく，小学生や校庭にある仮設住宅の住民，自治会を中心とした地区の人々など，地域住民と協力しながら，総合防災訓練（共助）を行う。

―団体紹介

本校では，総合的な学習の時間において，災害についての正しい知識・理解や，災害発生時および発生後の対応として自助・共助・公助のテーマを１年ごとにサイクルし，中学校３年間を通して防災・減災の力を高めている。これまでの成果により，東日本大震災発生時および発生後の対応において，中学生にできることを自ら見つけ，協力しながら避難所設営や炊き出しの手伝いに取り組む姿が見られた。

今回の大震災により，改めて中学生としてできることを見つめさせ，学校を起点とした地域ぐるみの防災意識の更なる高揚や，１０年後や２０年後に地域のリーダーとして防災教育の担い手となるような資質や能力の育成に大きく力を入れている。

【3】　くにたち地域外国人のための防災連絡会

プラン名　くにたち地域外国人のための防災対策

応募部門　大学・一般の部　　**所在地**　東京都国立市

☆☆☆

―目的・特徴等

昨年と今年の活動で在住外国人が主体となって作成した防災メモ、ステッカーや防災マップを使って訓練また災害時のみならず日常の生活での活用をはかる。

今年度のプランの特徴

昨年の大震災を受けて、防災に関しての意識についてはまだまだ十分でないことに気づかされた。特に日本語での情報交換は緊急時には限界がある。災害時通訳ボランテアの必要性を痛切に感じた。

行政，大学と協働して災害時通訳ボランテアを募集、育成する。

―団体紹介

本国立市は約 1400 名強の外国人の方が長期、短期あわせて在住している。

本連絡会は国立国際交流グループ、公民館、有志の外国人によって構成し、公民館を平常時のみならず、災害時にも外国人の情報収集の拠点と位置づけ、災害時に備えて外国人、国際交流グループ、公民館の共同参画で防災訓練、防災講座等防災に関する取り組みを 2009 年 12 月より行なっている。これらの活動を通じて、地域で孤立しがちな外国人を少なくするため、平常時から日本住民と外国人住民の交流を促進し、外国人がより安心、安全に過ごすことができる支援体制を構築する。

【4】　千葉県立東金特別支援学校

プラン名　防災コミュニティ＆コミュニケーション～北之幸谷から山武郡市へ「防災ユニバーサルねっと」を広げよう～

応募部門　小学校低学年の部～大学・一般の部　　**所在地**　千葉県東金市

☆☆☆

―目的・特徴等

地域の自治会や老人会等と特別支援学校との夜間を含めた合同防災訓練や防災安全マップの作成等を行うことで、地域と一体となって防災に対する意識を高める。学区である山武郡市（東金市、山武市、大網白里町、九十九里町、横芝光町、芝山町）をユニバーサルの視点でつなぎ、防災について得た情報を発信し共有していく。また、日々の授業を通して、障害のある児童生徒に対する防災教育のポイントを探ったり、障害に応じた防災用具の開発に取り組んだりする。

―団体紹介

本校は九十九里平野にあり、所在地である東金市は、古くから農水産物の集散地として栄え、温暖な気候風土に恵まれたところである。知的障害を中心に、自閉症、肢体不自由、聴覚障害など、他の障害を併せ持つ児童生徒の多様な教育的ニーズに応じた教育を行っており、児童生徒数１５３名、平成２４年度に４０周年を迎える。また、知的障害特別支援学校では県内唯一の寄宿舎設置校である。より地域とのつながりを深めるために、平成２３年度から、家庭・地域・学校のパートナーシップにより、地域と一体となった防災力の向上を目指して防災教育に取り組んでいる。

【5】　糸魚川市立根知小学校

プラン名　根知小発！ジオパークの大自然と向き合う地域防災教育 2012

応募部門　小学校低学年の部
小学校高学年の部

所在地　新潟県糸魚川市

☆☆☆

―目的・特徴等

2011年度の取組の成果と課題を基に、2012年度は、校内、校外における人と人との関わりを深めることを意識しながら、防災教育とジオパーク、地域（住民）の３つを関連付けた防災教育カリキュラム（総合的な学習の時間及び教科学習、学校行事）の開発を校内研修課題として取り組み、市内の学校への普及および啓発を図る。また、地域の自主防災組織と連携した防災訓練を行い、地域防災の構築を図る。

―団体紹介

当校は、糸魚川ジオパークのほぼ中央に位置し、全校生徒31名のへき地・複式学校です。学区には、糸魚川ー静岡構造線が露呈するフォッサマグナパークなどのジオサイトがあり、自然が豊かで、伝統的な文化が多く残る地域でもあります。しかし、谷間の地という特性から、昔から地滑りや土砂災害、熊や猿、猪等も頻繁に出没し、生活をしていく上で地域防災が重要となる地域です。また、地域の人口の約半数が65歳以上の老人であり、地域内には中学校・高等学校がないため、有事の際の小学校の対応の仕方が重要となります。

【6】　横浜市立北綱島小学校

プラン名　横浜型「学校・地域・保護者連携防災教育」への挑戦
「地域の自然と社会への理解を育て、学校・家庭・地域が連携して推進する防災教育」
サブテーマ　大震災から絶対守る！子どもたちとこの町

応募部門　大学・一般の部

所在地　神奈川県横浜市

☆☆☆

―目的・特徴等

地域・学校・家庭が連携して北綱島小学校区家庭防災マニュアルを策定することにより、保護者と地域住民と学校が、事前の備えと大地震時にとるべき行動の基準を共有し、大人が的確な対応をとることのできることを児童への防災教育の基盤とする。

―団体紹介

木造家屋密集地帯である学区に対して、どのような防災対策、防災教育をしていくかを考えた。

学校運営協議会で、今年の取組の重点を「防災教育」と「総合的な学習の時間」の確立とし、年間を通して取り組み、地域・学校・保護者連携で進める防災教育を実現しつつある。

【7】　立命館大学国際部国際協力学生実行委員会（CheRits）

プラン名　The Way to Abroad of Disaster Risk Reduction Education

応募部門　中学校の部
大学・一般の部

所在地　京都府京都市

☆☆☆

―目的・特徴等

災害に対する脆弱性が高い社会（とくに途上国）における防災教育の推進は急務と言われています。日本の防災教育団体が蓄積してきた知識や知恵は貴重であり、それを活かせば国外でも活躍できる思いますが、文化相違などの壁があり、容易ではないようです。そこで、当委員会がインドネシアにおいて文化・慣習に配慮しつつ防災教育を行なってきた経験を、日本の防災教育団体が海外で活躍する一助となるよう、マニュアル化したいと思います。

―団体紹介

東日本大震災と同程度のマグニチュードであった2004年スマトラ沖地震及びインド洋大津波をきっかけに復興支援として学校法人立命館が「学校再建プロジェクト」を始動し、それに共鳴した学生によって組織されたのが当委員会です。2006年のジャワ島中部地震においても同プロジェクトでインドネシアに小学校が再建され、その小学校と当該地域において防災啓発活動を5年以上継続しています。また、震災で失われたものを元に戻すだけでは不十分だと考え、当該地域の発展のために、さまざまな側面から地域の人々とともに活動しています。

【8】　東京都立調布特別支援学校

プラン名　地域全体の危機管理機能の向上を目指して　～調布にじ連絡協議会～

応募部門　大学・一般の部

所在地　東京都調布市

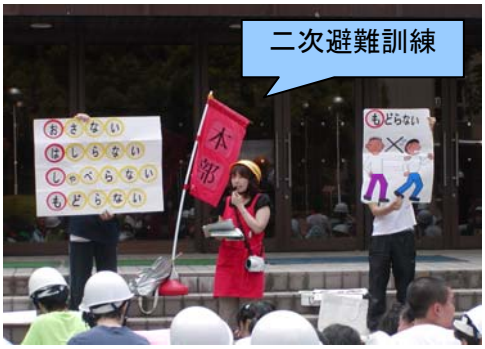
☆☆☆

―目的・特徴等

①Ｈ２４年度の「全校研究会」のテーマを、「防災教育の充実」と定め、教職員の危機管理意識の向上と、特別支援学校における児童・生徒の「防災教育・安全教育」の推進を図る。②本校が求められる防災機能を、隣接する国立大学・市立小学校とで役割分担・整理し、そこに地域社会も絡め、「地域全体での危機管理機能の向上」を推進していく。①は校内教職員の危機管理意識の向上及び児童・生徒への「身を守る」力の育成、②は「地域社会全体での危機管理意識の向上・障害をもつ人への支援体制の整備」が最終目標。

―団体紹介

小・中学部の知的障害の特別支援学校で、調布・三鷹・狛江・府中の４市を学区域とし、児童・生徒数は現在１９２名です。自閉症または自閉的傾向の児童・生徒が約６割、次にダウン症候群、てんかんと続き、多くの子どもたちの「言葉の指示よりも、絵・写真・身振りなど、目から入る情報の方が理解しやすい」特性を生かした教育活動を行っています。Ｈ２２年度、東京都教育庁指導部所管の「安全教育推進校」の研究指定を受け、「特別支援学校の安全・防災教育について」検証してきた学校です。



【９】　新潟市立新潟小学校

プラン名　「マイ防災マップ」で守ろう　わたしたちの命

応募部門　小学校高学年の部

所在地　新潟県新潟市

☆☆☆

―目的・特徴等

本プランは、全校体制で行う防災訓練マニュアルを基本としながら、自分の住む地域や登下校中に発生する災害に目を向け、想定外の事態に臨機応変に対応し、適切な行動を選択する力を身に付けることを目的とする。そのため、過去に地域で発生した災害を学び、地域の特性を考慮した避難方法を考える。そして、学習の成果を「マイ防災マップ」にまとめ、地域や保護者へ発信することで、地域や家庭と連携した防災教育を推進していく。

―団体紹介

新潟小学校は新潟市の中心部にあり、信濃川の河口と日本海の間の通称「新潟島」に立地する。地域には古くから栄えた古町商店街があり、デパートや銀行、官庁が集まる都市部である。昔から港町として栄えた新潟は、水の都とも言われ、町中のたくさんの堀に川舟が行き来する水に恵まれた町だった。現在では、道路の整備が進み堀は埋め立てられたが、海抜の低い土地は地盤が弱く、新潟地震では津波や液状化現象による被害もあった。北朝鮮によって拉致された横田めぐみさんの母校でもあり、様々な災害を想定した避難訓練を行っている。

【１０】　志摩市立国府小学校

プラン名　チームKOU防災プロジェクト

応募部門　小学校低学年の部
小学校高学年の部

所在地　三重県志摩市

☆☆☆

―目的・特徴等

小学校・幼稚園・児童館・自治会が合同で研修会や避難訓練等を行い、地域と連携した防災教育を実施することで「自助」「共助」意識の高揚と実践力の向上をめざします。また拠点学年の児童が地震津波体験や防災対策について地域の人たちに聞き取りを行い、その学習成果を新聞等で発信したり、防災啓発グッズ（手づくり防災カレンダー等）として全戸(約450戸)に配布したりします。地域と交流しながら楽しく防災学習を進めます。

―団体紹介

国府地区は志摩半島の東端に位置し、サーファーの集う「国府の白浜」でも知られています。リアス式の海岸地形や過去の記録から、今後大規模な津波被害が予想され、東海地震の津波浸水予想地域にも指定されています。津波防災に関心の高い地域性もあり、本校では昨年度より、三重県の防災教育推進校として、地域と連携した防災教育を推進してきました。全校児童は８３名。今年度から４年生を拠点学年として地域との交流を中心とした防災学習に取り組み、将来の減災を担う子どもの育成をめざしています。

【１１】　和歌山大学防災教育チーム　SAZANKA

プラン名　みんなのまちの防災手帳☆

応募部門　大学・一般の部

所在地　和歌山県和歌山市

☆☆☆

―目的・特徴等

和歌山県は、東南海・南海地震や中央構造線断層帯の活動による地震の発生が懸念されています。そこで、私たちのプランでは、「防災手帳作成」の教材化および教育現場での実践に取り組みます。この活動を通じて、子どもたちが実践的な知識を身につけ、地震と向き合う態度を養うことをねらいとしています。この防災手帳は、基本的な防災知識に加え、自分が住む地域の情報も盛りこみ、その地域オリジナルの防災手帳を作成するところが特徴です。

―団体紹介

和歌山大学防災教育チームSAZANKAは、東日本大震災を機に発足した有志の学生団体です。チーム名は、「困難に打ち勝つ」という花言葉をもつサザンカに因んでいます。メンバーは、学部・学年問わず構成され、現在13人を中心に活動しています。これまでの活動では、附属小学校での防災授業に参加したり、県内の防災イベントの運営に携わったりしてきました。今後は、防災教材開発および教育現場での実践を軸に、来る東南海・南海地震のために啓発活動をしていく予定です。

【１２】　みどりが丘小学校　学校支援委員会　環境整備部

プラン名　みどりが丘小学校避難キャンプ！

応募部門　小学校低学年の部
小学校高学年の部
大学・一般の部

所在地　千葉県八千代市

☆☆☆

―目的・特徴等

東日本大震災と同じような状況があったと想定して、家庭において災害時の初動対応を子供が行い、子供の対応力を向上させるとともに、その取り組み状況を確かめる。

避難については、一時避難所に集合させ、知らない人同士の班で、ウォークラリー形式で学びながら、危機回避術を知り避難する。避難先である学校では、大人は基本的に見守りで、子供自身が実践して、避難所として対応及び問題を解決しながら、取り組み状況を確かめ、経験を積むことで、災害時の克服ができるようにしていく。

―団体紹介

みどりが丘小学校は、平成22年に開校したばかりで、新興住宅地域に設立されたために地域同士の関係が希薄である。その中で、この震災を契機に震災対策及び子供たちの危機回避を学ばせる事と、知らない人同士の繋がりを作る意味では防災教育チャレンジは一つのきっかけをつくることになります。

私たちは、この住環境の中で、学校・学校支援委員会・保護者・隣接自治会・ボランティア団体・その他支援団体からの協力のもとで、このチャレンジプランを成功させて、全国の小学校の防災教育の事例をつくりあげることで、みどりが丘小学校をステップアップしていきたいと思います。

【１３】　NPO 法人大杉谷自然学校

プラン名　豪雨災害被害地からの実践的防災教育

応募部門　小学校高学年の部
中学校の部

所在地　三重県大台町

☆☆☆

―目的・特徴等

１．豪雨災害被災地である経験を生かした防災教育プログラムの開発する。
２．「災害から身を守る」ことを念頭に、防災教育プログラムにおいて災害に係る多面的な事象を体系化する。

防災教育プログラムに係る人材の育成。

―団体紹介

大台町では平成16年9月に豪雨災害に見舞われ甚大な被害がでました。災害直後からその自然の驚異を伝えるため、災害地見学や被災地での聞き取り調査活動を教育プログラムとして提供してきました。最近は山間地での豪雨災害が増加してきたため、当地での教育プログラムを完成させて、多くの方達の防災教育に役立てることができればと考えています。

【１４】　秋田理教クラブ

プラン名　忘れない！日本海中部地震の教訓 ―地震と津波の防災教育―

応募部門　小学校高学年の部
中学校の部

所在地　秋田県秋田市

☆☆☆

―目的・特徴等

秋田県の地震防災教材の現代化を図ることが大きな目的である。そのために，児童生徒の地震の認識や教員のニーズの分析，秋田県の地震環境を反映させた教材の開発，その開発した教材を使用して，学校の地震防災教育で行われていない内容に重点をおいた実践を行う。最終的にはその実践を基に，開発した教材の評価を行うことで完成度を高める。開発した教材は研究室のホームページ等で公開，または秋田県の理科教員に配布する予定である。

―団体紹介

私たち秋田理教クラブは2010年に発足し，これまで秋田県内で出前授業や実験教室など様々なイベントを開催して，秋田の子どもたちが理科に親しめるように，興味・関心を持てるように努めてきた。そんな中，2011年3月11日に東北地方太平洋沖地震が発生した。その後，私たちは実際に被災地へ視察してきた。それらを通して，1983年5月26日の日本海中部地震を体験している秋田県でも，地震や津波の防災により力を入れる必要があると強く感じている。秋田県の子どもたちが地震や津波から身を守れるように，私たちにできることを実践していきたい。

【１５】　わがやネット

プラン名　すすめ！かぐてんぼう隊

応募部門　中学校の部～大学・一般の部

所在地　愛知県名古屋市

☆☆☆

―目的・特徴等

大地震発生時における被害を少なくするには、住環境内の家具等の転倒防止対策を行うことはとても有効な手段です。その推進を目的に次の活動を行います。

１．家具等転倒防止対策の講習及び実習
２．施工支援者養成のためのテキストの編集

本プランでは講習等の対象を中学生や高校生にも拡大していく予定です。

―団体紹介

わがやネットは、福祉住環境コーディネーター取得者で構成し、平成12年に発足しました。家具等の転倒防止対策に関する活動は、平成16年に大学生との協働で、「かぐてんぼう隊」を結成しました。
その後、民生委員、町内会、社会福祉協議会、消防署等と連携して高齢者、障害者宅の家具の固定を実施しています。
また、平成23年からは、町内会や防災グループ等の活動支援のため「家具転倒防止対策推進協議会」を発足し、事務局として連絡会及び技術研究会の運営を行っています。

【１６】　四日市市中央学童保育所

プラン名　NPO 法人 HiroSystem 中央学童保育所東海地震防災対策

応募部門　保育園・幼稚園の部／小学校低学年の部／大学・一般の部

所在地　三重県四日市市

☆☆☆

―目的・特徴等

私たちが考えるプランとして以下のことを取り組みます。

1. 親子で防災を考える教材の開発。
2. 地域に適した防災を考える教材の開発。
3. 地域に適した非難・訓練の開発。

私たちが考えたプランの特徴として以下の内容です。

1. 地域住民が主体となる防災。

―団体紹介

当学童保育所は、三重県四日市市に所在しており、少子高齢化の進む現在、私達の将来に大切なものは何かと考え、「NPO 法人 HiroSysten」・「四日市市役所」・四日市市立中央小学校」・「地域自治会」と連携をとりながら、地域の児童の安全と健全育成を考えて活動し、社会貢献を目指しています。

【１７】　NPO 法人はままつ子育てネットワークぴっぴ

プラン名　子どもを守る防災ネットワーク事業

応募部門　大学・一般の部　　**所在地**　静岡県浜松市

☆☆☆

―目的・特徴等

東日本大震災のような未曾有の災害を目の当たりにし、これまでの災害への想定を見直す必要を誰もが感じた。そこで、

1．楽しみながら学ぶことで身につく防災教育を行い、幼児などの子どもにも防災意識を高める。
2．日頃からの地域のネットワークを見直し、災害時に備え、地域の防災力の向上を目指す。
3．女性など要援護者になりうる人の視点を持つ地域リーダーの育成をする。

―団体紹介

浜松市及びその周辺地域を拠点に、子育て中の当事者の視点を大切にして、行政・学校・企業・地域との連携を取りながら活動している。情報収集・発信、講座・研修、調査・研究、相談などの事業を展開している。「浜松市子育て情報サイトぴっぴ」は、毎月5～6万人の訪問者がある。事業の一つとして、誰もが簡単に、身近にあるものを使って、楽しみながら学べる防災講座を、全国で開催している。幼児から高齢者までの幅広い年齢を対象に、PTA,子育てサークル、自治会、青年会議所等からの依頼を受け、これまでに約20市区町村で開催した。

【１８】　山口県立大学災害ボランティア実行委員会　ぶちボラ YP 勇気

プラン名　学生による地域をつなぐ防災プロジェクト

応募部門　大学・一般の部　　**所在地**　山口県山口市

☆☆☆

―目的・特徴等

このプランの主な目的は防災豆知識BOOKを作ることを通して、災害時に備え、地域住民と学生、および地域住民同士のネットワーク作りをおこなうことです。この防災豆知識BOOKは地域住民との情報交換で得られた防災知識も取り入れます。それを活用して、住民や山口県立大学生に防災の意識啓発をおこない、災害時に助け合いができるようネットワーク構築します。

―団体紹介

東日本大震災発生後、学生にもできる被災地支援・ボランティア活動があるのではないかと、ぶちボラYP勇気は立ち上がりました。被災地（岩手県・宮城県）でのボランティア活動も経験し、ニーズをふまえて「私たちにできること」を考え、うちわを作って現地に送ったり、地域のイベントに参加して募金活動やパネル展示を行ったりしてきました。現在は主に地域の方と一緒に防災活動・現地支援活動を行っています。

また、フォーラムを開催するなどで中国地方の他大学との災害時のためのつながりづくりの活動もおこなっています。

MEMO

2012 年度防災教育チャレンジプラン（入門枠）

【1】 飯田市赤十字奉仕団

プラン名 郷土にまつわる災害伝承紙芝居の作成と活用

応募部門 大学・一般の部　　**所在地** 長野県飯田市

☆☆☆

―目的・特徴等

長野県南部天龍川沿いに位置する当地域において、50年前の昭和36年6月に発生した梅雨前線豪雨災害（36災害）は、近年の災害史上最大のものとして今も地元に伝えられています。

当時を語れる人が少なくなる中、土石流や浸水による水害の恐ろしさと、その時に関係者がどの様な行動をとったのかを、3百年前の災害伝承も織り交ぜた紙芝居にして上演することにより伝承していきたい。

―団体紹介

当奉仕団では平成12年から紙芝居を始め、現在は２班11名が活動しています。毎年新たな作品に取り組み、自ら脚本、絵の制作をして上演しています。完成した作品は「日本の赤十字」のように赤十字の歴史や思想の普及を目的にしたものや、地元に伝わる民話を題材にしたものが中心で、小中学校や福祉施設のほか県内外にも出かけて上演しています。特記すべきは新聞紙程の大判に描いた絵を使い（大会場ではプロジェクター）、登場人物の声を全員が分担しあい、音響効果も交えて上演することで見ごたえ十分です。

【2】 伊勢市立大湊小学校

プラン名 地域とともに ～津波に備える大湊小学校の防災～

応募部門 小学校低学年の部
小学校高学年の部　　**所在地** 三重県伊勢市

☆☆☆

―目的・特徴等

大湊町振興会が行う防災訓練、学校で行う避難訓練だけでなく、町外の避難場所の確認や安全マップ作り、児童から防災学習の成果を地域へ発表し、防災意識を広める活動を通して、津波に対する知識の習得や危険箇所把握能力の育成、避難場所や方法について自ら考え行動できる力を育てたいと考えています。

特に、地域を見て、地域について考え、地域に発信することといった、地域とともに防災教育をすすめることを大切にしていこうと考えています。

―団体紹介

大湊小学校は伊勢湾に流れ込む宮川と五十鈴川の河口にある大湊町にあります。学校の前には鷲ヶ浜が広がり、春の潮干狩りや、秋の焼き芋大会、季節ごとの浜そうじなどを行っています。海に近い学校ですので、こういった活動に取り組んでいますが、津波に関する心配もあります。伊勢市街地へは橋２本だけでつながっている大湊町では、防災への関心も高く、例年行われる、町防災訓練には多数の方が参加されます。東海・東南海・南海地震での津波被害も予想される大湊町に生活する子どもたちが、地域とともに防災教育に取り組んでいます。

【3】　江東区立第二南砂中学校

プラン名　地域に根ざした防災教育プログラムの作成

応募部門　中学校の部　　**所在地**　東京都江東区

☆☆☆

―目的・特徴等

東日本大震災をきっかけに、河川や運河に囲まれ海に近く標高が低い土地が地域に広がっている、地盤も軟弱で液状化しやすいなどの本校及び周辺地域の特性を考え、地震・津波・水害を想定した防災教育プログラムの策定は緊急の課題と考える。これまでも火災・地震・不審者等に対応する避難訓練は行ってきたが、自然災害に対する防災訓練を充実させると共に、社会科や理科など各教科の授業での防災に関わる教育を体系付け、二南中版防災教育プログラムの構築を目指す。

―団体紹介

本校は“水彩都市”江東区のほぼ真ん中、砂町が深川と接する土地に立地する。学校の周りには、横十間川、仙台堀川、小名木川等の河川（運河）があり、親水公園も多く、都心としては水と緑に恵まれた落ち着いた環境にある。学校の規模は１～３学年各２学級、全６学級で全校生徒は204人（平成24年１月現在）の小規模校である。学校が小さいということで、全員の教員がほぼ全生徒を知っているなど、生徒と先生の距離が近い反面、学校全体の活気に欠けるという面もある。地域には古くからの町並みと事業所やマンション等とが共存しているが、学校に熱い視線を送り応援を惜しまない土地柄である。その中で、生徒たちはすくすくと育まれている。

【4】　能登町立小木中学校

プラン名　自分たちの地域を自分たちの手で守ろうプロジェクト

応募部門　中学校の部　　**所在地**　石川県能登町

☆☆☆

―目的・特徴等

「自分たちの住む小木地区を自分たちの手で守る」を目標に掲げ、防災･減災活動に取り組む。主な活動として、津波から避難する際の助けになるよう、昨年度作成したハザードマップをもとに海抜表示板を作成し、各地区の避難経路に立てる。また、避難した際にどのような行動をとればよいのか状況判断ができるよう、さまざまな活動の中心となることを想定して小木中学校防災士を育てる活動を行う。活動のまとめとしては、自分達が学んだことを生かしていけるような小木地区を対象とした津波避難訓練を行う。

―団体紹介

本校がある小木地区は、能登半島の先端部分に位置しており、東日本大震災で大きな被害が出た三陸海岸と同じリアス海岸です。全校生徒６３名で昨年度から始めた防災教育を通して、小中高の連携や地域の人たちとの結びつきをさらに深めています。港町で、保護者の多くが漁業関係の仕事をしており、１年の多くは船に乗っています。ですから、災害が起こった場合は中学生が活動の中心となります。適切な判断･行動ができる中学生を育てることが、この地域の中で中学校が果たす大きな役割です。

【5】　山口県柳井市立小田小学校

プラン名　いつか来る　南海・東南海地震に備えて

応募部門　小学校低学年の部
小学校高学年の部

所在地　山口県柳井市

☆☆☆

―目的・特徴等

本プランは、将来来ると予想される南海・東南海地震に備えて、河口に位置している本校の地形を考慮しながら、全学年で体系的に防災教育に取り組むものである。教科等と関連させながら地震・津波についての正しい知識を学ぶとともに、自助の心と共助の心を培い、生きる力を育てることをめざす。また、それを保護者や地域に広めることにより、児童だけでなく、住民の防災意識を高めるとともに、防災対応能力の向上が期待できる。

―団体紹介

本校は、柳井市南部の室津半島東側、土穂石川の河口に位置している全校児童百人弱の小規模校である。校区は、南北約４㎞の狭い帯状をなしており、背後には山が迫っている地形にある。南海・東南海地震が起きた場合、瀬戸内海にも数メートルの津波が押し寄せると言われており、河口に位置する本校にも被害が及ぶ可能性がある。

2011年度、東日本大震災を教訓にして、４学年が総合的な学習の時間に防災教育に取り組んだ。それを2012年度は校内研修として全学年で取り組む予定である。

【6】　社会福祉法人 大乗福祉会 二之宮保育園

プラン名　自作絵本による防災教育

応募部門　保育園・幼稚園の部

所在地　群馬県前橋市

☆☆☆

―目的・特徴等

防災意識を高める絵本や紙芝居を、子どもたちと一緒に想像を膨らませながら楽しんで作成し、防災意識を高めると同時に豊かな感性を育んでいく活動にしたいと思います。

絵本や紙芝居が完成したら、園内だけでなく、保護者や近隣の幼稚園や子育て支援などで利用してもらうようにしたいと思います。

―団体紹介

絵本の読み聞かせを全クラスで毎日数回行うほか、保護者への貸し出しをして、家庭でお父さんお母さんに読み聞かせをしてもらうような活動をしています。

読み聞かせを日常的に行うことで、子どもたちの集中力を高め、想像力を豊かにし、親子の絆をつくっていくことができればと考えています。

【7】　八王子市立椚田小学校

プラン名　地域とともに、安全対策！

応募部門　小学校低学年の部
小学校高学年の部

所在地　東京都八王子市

☆☆☆

―目的・特徴等

多くの市民は、災害が起きたときに「学校に行きさえすれば、何とかしてくれる。」と考えがちだが、実は学校は子供たちの安全確保が第一であり、場所は提供するが、教職員が市民のために動くことは難しい。すなわち町会や自治会が中心になって自分たちで体制を組まないといけない。そこで、市民の防災意識を高めるために八王子市防災課などから専門家を呼び講演会を行うとともに、防災計画を作成し、実際に炊き出しなどの体験を行う。

―団体紹介

本校は、京王高尾線のめじろ台駅から１２分ほどの南西に位置し、旧家の多い椚田地区、新興住宅の多いめじろ台地区、マンション群の狭間地区と３つの特徴のある地域を学区域にもつ緑豊かな自然に恵まれた環境の学校である。学級数は各学年３クラスの１８学級、児童数は５８０名の中規模の学校である。２４年度は市の算数研究指定校２年目として１１月に発表会を行う。昨年度は都の生活習慣や運動習慣等の定着に関する実践研究校でもあった。今年度は新たに、ＩＣＴを使った授業研究推進校と都の安全教育推進校として研究を行う予定である。

「避難訓練」担当の先生の話を真剣に聞いています

【8】　東京都葛飾区立常盤中学校

プラン名　常盤中学校防災教育プロジェクト

応募部門　中学校の部

所在地　東京都葛飾区

☆☆☆

―目的・特徴等

災害発生時に、自ら危険を予測し、回避するためには、正しい知識を身につけるとともに、習得した知識に基づいて、的確に判断し、迅速な行動が取れることが必要である。さらにその「主体的に行動する態度」を持った生徒が、社会の一員となって地域に根付いていくことをめざしている。

① 地震等の災害に対する知識の習得と防災意識を高める。
② 災害発生時の行動について学ぶ。
③ 地域住民と連携して、地域防災について確認する。

―団体紹介

葛飾区立常盤中学校は、今年開校57年を迎えます。全校生徒567名、16学級と区内でも規模の大きな学校です。北はJR常磐線金町駅から南は京成線柴又駅までと、広い学区域を有しています。生徒は明るく素直で、挨拶や感動的な学校行事などの自校の伝統を誇りにする、瞳輝く子供たちです。また、学校に対する保護者の信頼も厚く、地域が一体となって生徒を育てようとする姿勢があり、子供たちのために学校・家庭・地域が連携した教育を推し進めています。

スローガンは、「勉強に集中、部活に熱中、文武両道常盤中！」です。

【9】　葛飾区立綾瀬中学校地域応援団

プラン名　災害に耐える力を育てる活動

応募部門　中学校の部
大学・一般の部

所在地　東京都葛飾区

☆☆☆

―目的・特徴等

防災に関する教育活動を、保護者や地域に公開し、保護者や地域の方とともに行う。この取り組みを「葛飾区学校地域応援団」の施策の具体的な展開の柱の一つとして位置づけ、保護者や地域と共に防災教育を進め、継続的な取り組みとして拡充させる。学校、町会、区、消防など関係機関との連携を重視し、専門的な評価や助言をいただきながら、生徒に防災意識を涵養し、災害の際に役立つ技能や知識を身につけさせることを目指す。

―団体紹介

「綾瀬中学校地域応援団」は、平成２４年度に開設予定です。２３年９月から毎月１回の設立準備会を開催し、活動内容について検討してきました。準備会のメンバーは、教員・ＰＴＡ役員・ＰＴＡＯＢ・町会関係者などです。「防災減災」と「緑化美化」を応援団活動の中心とすることが決まりました。学校地域応援団が、生徒と地域の方々との橋渡しを担い、災害に耐える力のある、美しい地域を支える重要な役割を担うことのできる若者を育ててゆくことを目指し、平成２４年度に具体的な行動を起こしてゆく予定です。

【10】　九十九里町立片貝幼稚園

プラン名　まもろう！ぼくのいのち、わたしのいのち。

応募部門　保育園・幼稚園の部

所在地　千葉県九十九里町

☆☆☆

―目的・特徴等

・地震、津波等の災害発生に備え、園児への意識付けがなされるように、教育要領の各領域と関連させて保育計画を見直す。
・防災指導計画に基づいた避難訓練計画、職員の役割分担の確認、緊急時の対応について共通理解を図り、定期的な避難訓練を実施する。
・消防署や役場、家庭、地域の方々と連携して訓練を行い、園児が災害時の避難方法を身に付け、“自分の命は自分で守る”という意識を高める。

―団体紹介

・昭和35年創立。当初より3年保育を実施している。
・平成23年度は3才児32名、4才児34名、5才児29名、合計95名の園児が在籍している。
・遊びを通して子どもが周囲の環境と主体的に関わる教育を進めている。特に自然との関わりや小学校、中学校、地域の方々との交流を通して子どもたちがさまざまなことを自分から積極的に学んでいる。

【11】　熊本養護学校

プラン名　障がいのある子どもたちの防災･防犯
～特別支援学校における取り組み～

応募部門　小学校低学年の部 ～ 高等学校の部

所在地　熊本県熊本市

☆☆☆

―目的・特徴等

・特別支援学校（知的）における防犯・防災への取り組み
・知的障害者への配慮とそのポイント
・外部との連携、外部評価の取り組み

―団体紹介

熊本市中心部に位置し、児童生徒と職員を合わせて約２８０名が在籍する小学部、中学部、高等部、重複学級を有する市内唯一の特別支援学校です。近年では、分教室を開設し、今後も増設予定である。

【12】　南阿蘇村立中松小学校

プラン名　阿蘇五岳のふもと中松 ～火山との共存～

応募部門　小学校低学年の部、小学校高学年の部、大学・一般の部

所在地　熊本県南阿蘇村

☆☆☆

―目的・特徴等

活火山を含む阿蘇五岳の南の麓に位置するため、いかに火山噴火に対応すべきなのか、また、いかに共存していったら良いのかの視点での防災教育をしていきたいと考えています。また、過去に、阿蘇五岳に降った雨がその斜面を駆け下り、本校区に死者が出る甚大な被害をもたらしたこともあります。よって、水害から命を守る取組についても実施していきたいと考えています。さらには、阿蘇火山博物館等の関係機関とも連携を取り合いながら科学的な面もしっかりと学ばせていきたいと考えています。

―団体紹介

阿蘇五岳の麓に位置する児童数８４名の小学校です。１年生から６年生までとても仲良く毎日を過ごしています。近くには樹齢４００年を超える「一心行の大桜」があります。

本校の学校教育目標に「ふるさと中松を愛し、夢を持ち自ら学び、主体的に行動できる心豊かな子どもの育成」を掲げ、南阿蘇の地域を学習することを通してふるさとの良さに気づき、その良さを多くの人に発信していく取組を行っています。

また、阿蘇からの自然の恩恵も受けており、阿蘇に降った雨が何年何十年もかけて地下水となり多くの湧水源が本校区内に数多くあります。オオルリシジミなどの希少動植物も見ることができます。

【13】　ＮＰＯ法人　大沼・駒ヶ岳ふるさとづくりセンター

プラン名　いざという時は温泉へ！～流山温泉施設を防災の拠点に～

応募部門　大学・一般の部　　**所在地**　北海道七飯町

☆☆☆

―目的・特徴等

函館から車で1時間弱の大沼地区は、秀峰・駒ヶ岳が大沼国定公園を見下ろす風光明媚な地域です。駒ヶ岳は活火山で、歴史上何度も噴火を繰り返してきました。函館開港以来の観光地でもあります。この地域の流山温泉施設を地震や噴火など、いざという時の防災の拠点にするべく、家族で楽しみながら参加できるイベントを開催したいと思います。その過程で、地域の人たちが気軽に集える場づくりにも努めたいと考えています。

―団体紹介

2011年5月に設立された新しいNPOです。自然体験プログラムや森づくりを軸とし、古くて新しい生活スタイルの提案をしています。流山温泉施設を活用した地域再生にも取り組んでいます。東日本大震災後、自然体験活動ネットワークを生かした「ふくしまの子どもを守ろうプロジェクト」に参画し、夏休み・冬休みに述べ600人の福島県からの親子や子ども達の受け入れを行いました。自然体験活動やキャンプの技術は、いざという時に役に立つ技術です。今後も、この活動は続けていきながら、地域の防災教育にも関わっていきたいと思います。

MEMO

会 場 利 用 案 内

■ 会場座席

・「会場図」に従い、所定のエリアにご着席ください。

■ 施設利用にあたっての注意

・喫煙は、指定の場所以外は《　禁煙　》です。
・携帯電話は、電源オフまたはマナーモードに設定し、会場内での通話はご遠慮ください。
・ゴミは、各自の責任ですべてお持ち帰りください。
・立入禁止ロープが設置されている箇所、未使用の部屋には入らないでください。
・施設常設の機器等については、お手を触れないでください。

■ 施設見学について

・以下の施設を昼休み、休憩時間に各自で見学可能となります。
①そなエリア 1F 災害体験ゾーン（所要時間約 30 分）
　ニンテンドーDS から出題されるクイズを解きながら首都直下地震の発災から避難までの一連の流れを体験できる「東京直下 72h ツアー」
②そなエリア 2F 防災学習ゾーン（所要時間約 30 分）
　首都直下地震をわかりやすく紹介するミニシアター、PC による防災クイズ、防災学習映像のライブラリー、世界の防災用品や防災ゲームの展示体験コーナー。映像ホールではアニメ「東京マグニチュード 8.0～東京直下 72h～」（約 20 分）を上映

■ 発表・講演等の記録について

・活動報告会の記録のため、事務局側にて、音声の録音、ビデオ撮影、写真撮影を行います。また、これら資料をデータベース化し、防災教育チャレンジプラン関係する媒体（ホームページ、パンフレット、報告書等）または関係者に供しますので、ご了承ください。

■ ネームプレートについて

・受付でお受け取りになったネームプレートは、首からお提げください。
・昼食時等の外出の場合、入館時には必ずネームプレートをご提示ください。
・お帰り時は、受付常設のネームプレート回収ボックスに、ご投函ください。

《出演団体対象》

■ 展示物について

・展示物掲示～配置～撤去及び回収は、出演団体各位の責任で行ってください。
・施設の床、壁面、備品等を汚したり、傷をつけたりしないよう、ご注意ください。

■ 発表方法について

・事前にご提出のスライドデータに基づき、説明を行っていただきます。施設のセキュリティの都合上、当日のデータ差し替えは、一切できません。
・発表時間は事前にお知らせしたとおりです。時間の経過は、ベルでお知らせしますので、**時間厳守**でお願いします。
・各部の発表順が２番目以降の発表者は、ひとつ前の団体の説明が始まるのと同時に、各自で待機席まで移動していただき、ご着席ください。

避難誘導の御案内

災害発生時には、当会場は政府の合同現地対策本部が設置される施設となります。
首都圏を中心とする災害発生時、次のとおりにお願いします。

1. 待　機
   避難指示があるまで、施設内で待機してください。
2. 展示物等の撤収・避難指示
   内閣府より事務局へ避難指示が入ります。事務局の指示にしたがってください。
3. 避　難
   避難指示に基づいて、東京都江東区が指定する避難所（有明スポーツセンター）へ避難します。
   現地まで、事務局スタッフが誘導します。事務局の指示に従うようにしてください。

■避難誘導図

※　避難場所へは、上図の矢印に沿って移動します。

2011 年度 審査委員会

委員長	近藤 信司	独立行政法人国立科学博物館 館長
委 員	安藤 雄太	東京ボランティア・市民活動センター アドバイザー
委 員	重川 希志依	富士常葉大学大学院 環境防災研究科 教授
委 員	清水 善久	東京ガス株式会社 導管ネットワーク本部 防災・供給部 部長兼供給指令室長
委 員	庄子 憲義	東京海上日動リスクコンサルティング株式会社 常務取締役
委 員	小澤 良一	全国連合小学校長会 対策部長／渋谷区立富谷小学校 校長
委 員	戸田 芳雄	東京女子体育大学 教授
委 員	中島 康弘	東日本電信電話株式会社 ネットワーク事業推進本部 ｻｰﾋﾞｽ運営部災害対策室長
委 員	長谷川 彰一	内閣府大臣官房審議官（防災担当）
委 員	林 春男	京都大学防災研究所 巨大災害研究センター 教授
委 員	藤吉 洋一郎	大妻女子大学 文学部 コミュニケーション文化学科 教授
委 員	山口 博	東京電力株式会社 常務取締役・電力流通本部 副本部長
委 員	米田 徹	新潟県 糸魚川市長／日本ジオパークネットワーク 会長
委 員	渡邉 正樹	東京学芸大学教育学部 教授／日本安全教育学会 理事長

（平成 24 年 2 月 11 日現在、50 音順、敬称略）

ＭＥＭＯ

防災教育チャレンジプラン募集の御案内

1. 募集の概要

防災教育チャレンジプランでは、全国で取り組まれつつある防災教育の場の拡大や質の向上に役立つ共通の資産をつくることを目的に、新しいチャレンジをサポートいたします。

そのプランの準備・実践に当たって発生する経費を支援し、実現に向けて防災教育チャレンジプランアドバイザーが伺うなどして相談などの支援を行います。

応募の中から選ばれたプランは、活動計画について前年度の活動報告会（最終報告会）で発表、さらに1年間実践した結果を、交流フォーラム（中間報告会）と活動報告会（最終報告会）で成果を発表していただきます。※入門枠は発表不要

活動報告会（最終報告会）においては、優秀な実践活動に対して防災教育大賞、防災教育優秀賞、防災教育特別賞を授与いたします。

また、皆さんのチャレンジプランの成果はホームページなどで広く公開いたします。

● 入門枠「はじめの一歩」について

2012年度募集では、初めて防災教育に取り組まれる方を対象とした入門枠「はじめの一歩」を新たに設けました。

※入門枠についての詳細はホームページ内の募集要項（入門枠）をご覧下さい。

サポート内容	一般枠	■プランの実践にかかる経費の提供／上限 30 万円（査定による） ※活動・予算計画書の提出及び団体名義の口座が必要となります。 ■交流フォーラム（中間報告会）・活動報告会（最終報告会）発表者への交通・宿泊費の支給。（1名分×3 回分） ■プランの実現に向けて、実行委員会が認定する防災教育チャレンジプランアドバイザーが助言や現地指導等の支援を行います。
	入門枠	■プランの実践にかかる経費の提供／上限 5 万円（査定による） ※活動・予算計画書の提出及び団体名義の口座が必要となります。 ■プランの実現に向けて、実行委員会が認定する防災教育チャレンジプランアドバイザーが助言や現地指導等の支援を行います。
表彰	一般枠	■活動プロセス及び成果に対して審査を行い、優秀な実践活動に対して、防災教育大賞・防災教育優秀賞・防災教育特別賞を決定し、 表彰状と盾を授与いたします。 ■防災教育チャレンジプラン「サポーター」として認定いたします。
	入門枠	■活動プロセス及び成果に対して評価し、優秀な実践活動について表彰いたします。

2. 応募資格

● 防災教育を一層充実させたいと考えている教育・社会福祉施設（保育施設・幼稚園・学校等）、教育委員会、NPO、地域団体（民間事業所、各種団体、行政機関）、個人等

● 採用された場合は、都内にて開催予定の実践団体決定会、中間報告会、最終報告会の計3回の会合に出席できること。（一般枠のみ）

3. 応募部門（プランの対象別）

A. 保育園・幼稚園の部　B. 小学校低学年の部　C. 小学校高学年の部
D. 中学校の部　E. 高等学校の部　F. 大学・一般の部

4. 募集期間

毎年 9 月頃～12 月頃に募集。詳細は、ホームページ上でお知らせいたします。

防災教育チャレンジプラン

■　防災教育チャレンジプラン実行委員会事務局
E-mail：cpinfo2865@bosai-study.net

■　防災教育チャレンジプランホームページ
http://www.bosai-study.net/

※E-mail アドレスは、予告なく変更することがあります。
最新情報は、ホームページでご確認ください。